

3	学校名 住田町立世田米小学校 外4校	H29～R3
---	--------------------	--------

令和3年度研究開発実施報告書

1 研究開発の概要

(1) 研究のねらい

岩手県の中山間地域に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町では、教育振興基本計画基本目標「生涯学び続け、新しい時代を切り拓く心豊かな人材の育成」の基に、自立して生き抜く力や協働する力、豊かな人生や地域づくりを主体的に創造する力を身につけた人材育成を目指し、これまでもその風土を生かした教育を推進してきた地域である。しかしながら、時代の潮流の中、中山間地域における地域課題に直面している現実もまた事実である。本町が、将来にわたって持続可能な町の姿を描く上でも、ふさわしい資質・能力を獲得しながら自己の人生や社会を創造できる人材育成を目指すことは、今後ますます不可欠であり、時代が今後どのように変化を遂げてても不易な考え方である。したがって、本町で学ぶ子どもたちに、町内の小・中学校及び県立高校が一体となって具体的に育むべき資質・能力を明らかにしながら、着実に育成することができるよう、全町を挙げた教育の展開を試みる研究開発に取り組む。

(2) 研究の方針【図1-1：住田町研究開発グランドデザイン】

前述の研究のねらいを踏まえ、本研究開発においては、小・中学校及び高等学校が育成を目指す資質・能力を共有し、一体的に推進する教育を展開する。具体的には、12年間を通して、「子どもたちが変化の激しい社会において、充実した人生を実現していくために、豊かな心を持ち、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力（社会的実践力）の育成」を目指す。そのために、住田町内の教育の特色を生かした教科「地域創造学」を新設し、これを中核に位置付けた12年間の教育課程の編成と、その指導方法及び評価方法等の開発を行っている。以下大きく3点について、具体的な研究実践をとおして提言を行う。

- 「社会的実践力」を育むため「地域創造学」を据えた教育課程の編成をすること
- 「社会的実践力」を効果的に育む指導方法を探ること
- 「社会的実践力」を評価するための具体的指標の開発を行うこと

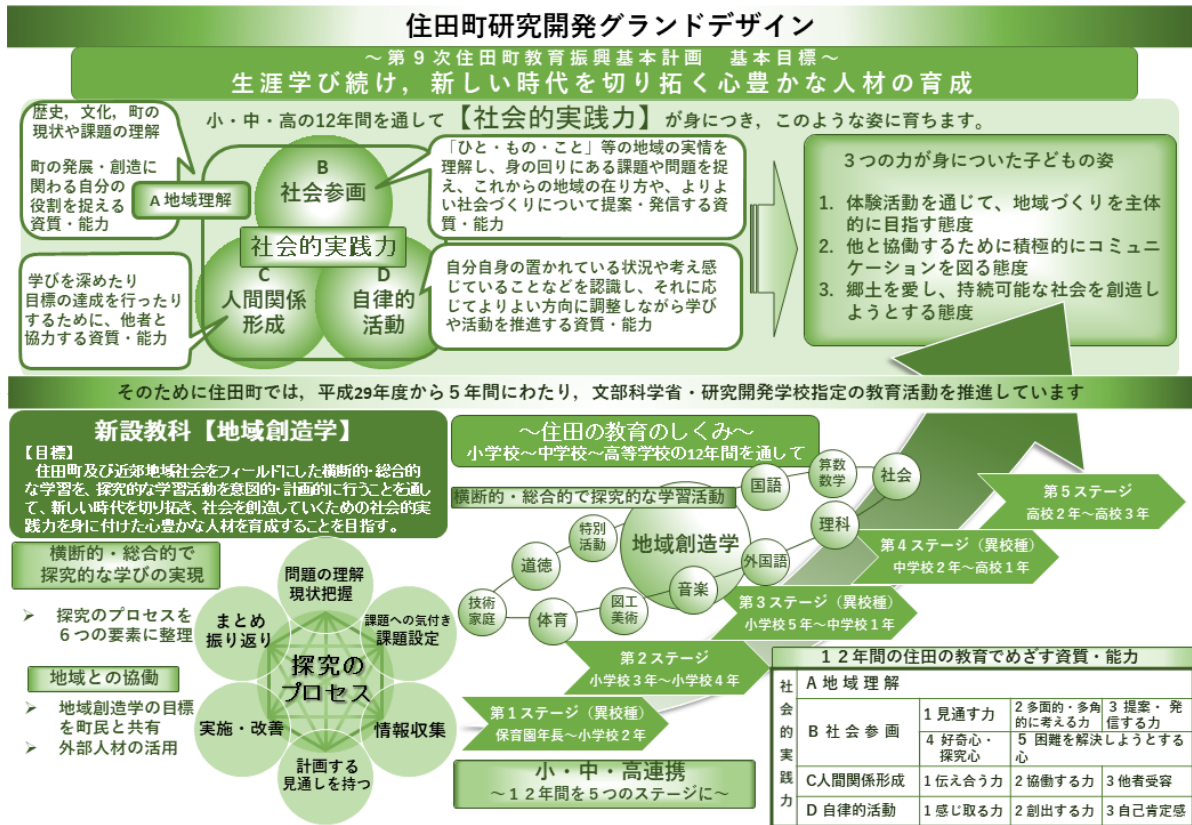
(3) 研究仮説

新教科「地域創造学」において、小学校から高等学校までが、新しい時代を切り拓き社会を創造していくための社会的実践力の育成を共通に目指し、以下の手立てを講ずることにより、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材を育成することができるであろう。

そのために具体的な手立てとして、以下の5点に取り組む。

- ① 新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力（社会的実践力）の規定
- ② 社会的実践力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発
- ③ 社会的実践力の育成を評価するための具体的指標の開発
- ④ 教育課程の特例による教科「地域創造学」の創設と授業実践
- ⑤ 新設「地域創造学」に関するアンケート調査や外部評価の効果的な活用と教育課程等の在り方の検証

【図1-1】 住田町研究開発グランドデザイン



(4) 教育課程の特例

- ① 小学校では、生活科、特別の教科道徳、外国語活動、外国語及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1学年106時間、2学年110時間、3・4・5・6学年では85時間設定した。
- ② 中学校では、全学年において、特別の教科道徳、外国語及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では62時間、2、3学年では82時間設定した。
- ③ 高等学校では、全学年において総合的な探究の時間を減じて、「地域創造学」を1単位35時間設定した。

2 研究開発の経緯

(1) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	(1) 新設教科「地域創造学」新設の準備 ① 小中高12年間の系統的教育課程の研究 ② 育成したい資質・能力を現在の学校や地域の抱える課題と照らし合わせて明確化 ③ 育成したい資質・能力と教科の内容、指導と評価方法の在り方についての検討、新設教科と既存教科との関連を確認 ④ 新設教科の目標の修正 ⑤ 新設教科の評価規準作成と評価方法の研究(試案の作成) (2) 小中高の系統の指導のための各種合同研修会等の実施 ① 研究内容、研究方法の明確化と共通理解 ② 新設教科と既存の教科の関係性をより明確にするための分析 ③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、意欲的に授業に取り組みさせる指導方法の工夫・改善 (3) 社会的実践力の把握と分析 ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査(全国学力・学習状況調査や心理尺度等)との関連についての分析及び今後の検証に向けての評価準備

	<p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 4年間を見通した研究計画及び運営指導委員会、研究組織の編成 ② 保護者・地域との連携のため、周知、広報活動の展開 ③ 運営指導委員会による評価を実施し、第2年次の計画を作成 ④ 町立保育園から幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、新たな幼児教育課程についての検討
第2年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の新設</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と修正 ② 育成したい資質・能力を、現在の学校や地域の抱える課題と照らし合わせて再度明確化 ③ 新設教科の実践及び検証 ④ 新設教科と既存教科との関連を確認 ⑤ 新設教科の目標の修正 ⑥ 新設教科の評価規準作成と評価方法の研究 ⑦ 学習指導要領解説地域創造学編の執筆開始 <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の実践交流と共通理解 ② 新設教科と既存の教科の関係性をより明確にするための分析 ③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、児童生徒が意欲的に授業に取り組む指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と検証 <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価及び次年度の評価準備運営指導委員の指導を受けながら、社会的実践力を継続的に見取っていくための教育達成測定項目の作成に着手した。 <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 運営指導委員会による評価をもとにした第2年次のまとめと第3年次の計画作成 ② 保護者・地域との連携のための周知、広報活動等の展開 ③ 町立保育園から幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、新たな幼児教育課程についての検討
第3年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と修正 ② 新設教科の評価規準と評価方法の修正 <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の実践交流と研究協議 ② 新設教科と既存の教科の関係性についての分析・探究 ③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と改善 <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析・評価及び、次年度の評価準備 <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 運営指導委員会による評価をもとにした第3年次のまとめと第4年次の計画作成 ② 保護者・地域との連携のため、周知、広報活動等の展開 ③ 町立保育園から幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、新たな幼児教育課程についての検討

第4年次	<ul style="list-style-type: none"> (1) 新設教科「地域創造学」の本格実施 <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証 ② 新設教科の評価規準と評価方法の実施と検証 ③ 新設教科「地域創造学」の教科書作成作業への着手 (2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の実践交流と研究協議 ② 新設教科と既存の教科の関係性についての分析・探究 ③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、意欲的に授業に取り組みさせる指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と改善 ⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施 ⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を学校公開研究発表会の実施により公開し、研究成果を次年度へ還元する方策の提示 (3) 社会的実践力の把握と分析 <ul style="list-style-type: none"> ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析・評価 (4) 研究開発実施に関する体制の整備 <ul style="list-style-type: none"> ① 運営指導委員会による評価をもとにした第4年次のまとめ ② 幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、「地域創造学」とのつながりに配慮した新たな幼児教育課程についての検討
第5年次	<ul style="list-style-type: none"> (1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善 <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証 ② 新設教科の評価規準と評価方法の実施と検証 ③ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）作成 (2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の実践交流と研究協議 ② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究 ③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組みさせる指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と改善 ⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善 ⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を学校公開研究発表会の実施により公開し、研究成果を次年度へ還元する方策の提示 (3) 社会的実践力の把握と分析 <ul style="list-style-type: none"> ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析・評価 (4) 研究開発実施に関する体制の整備 <ul style="list-style-type: none"> ① 運営指導委員会による評価をもとにした第5年次のまとめ ② 幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、「地域創造学」とのつながりに配慮した新たな幼児教育課程についての検討

(2) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> (1) 研究開発委員会と運営指導委員会（年3回）の開催 <ul style="list-style-type: none"> ① 4年間の研究について具体的内容や方向性の決定 ② 第1年次の実践研究についての学術的評価 (2) 児童生徒の実態把握を行い、変容等の研究成果を確かめる評価の在り方を検討 <ul style="list-style-type: none"> ① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ② 心理尺度、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価と分析の方向性について検討 ③ 全国学力・学習状況調査（4月）、岩手県小・中学校学習定着度状況調査（10月）、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）、（1月）、岩手県中学校新入生学習状況調査（4月）、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査（4月）を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析し、評価計画を作成④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ④ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関する

	<p>アンケート等の追跡調査</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月、7月、1月、2月に開催</p>
第2年次	<p>(1) 運営指導委員会(年3回)の開催 第2年次及び2年間の実践研究についての指導・助言</p> <p>(2) 児童生徒の実態把握を行い、変容等の研究成果を確かめる評価の在り方を検討</p> <p>① 全国学力・学習状況調査(4月)、岩手県小・中学校学習定着度状況調査(10月)、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-DOテスト)(1月)、岩手県中学校新入生学習状況調査(4月)、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査(4月)を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析し、評価計画を作成</p> <p>② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価と分析の方向性について検討</p> <p>③ 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方についての協議</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を、5月、7月、1月、2月に開催</p> <p>② 本研究の成果と課題についての評価を適切に推進できるよう改編した研究所の組織により、学校カリキュラム、地域創造学の評価や指導の在り方等を検討</p>
第3年次	<p>(1) 運営指導委員会(年3回)の開催</p> <p>① 第3年次及び3年間の研究についての指導・助言</p> <p>(2) 第2年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価</p> <p>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</p> <p>② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施</p> <p>③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-DOテスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査による、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点からの分析、評価</p> <p>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</p> <p>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月、7月、1月、2月に開催</p>
第4年次	<p>(1) 運営指導委員会(年3回)の開催</p> <p>① 第4年次及び4年間の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ</p> <p>② 今後の教育課程についての検討</p> <p>(2) 第3年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価</p> <p>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</p> <p>② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施</p> <p>③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-DOテスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点からの分析、評価</p> <p>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</p> <p>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>(4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月、2月に開催</p>
第5年次	<p>(1) 運営指導委員会(年3回)の開催</p> <p>① 第5年次及び5年間の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ</p> <p>② 社会的実践力を育むことを目的とした授業公開研究会を開催</p> <p>③ 第5年次以降の教育課程についての検討</p> <p>(2) 第四年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価</p>

	<p>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</p> <p>② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施</p> <p>③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-DOテスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価</p> <p>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</p> <p>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>(4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月・2月に、教職員研修会を7月に開催</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

3 研究開発の内容

(1) 教育課程の編成に向けて

① 社会的実践力について

本研究においては、育成を目指す「社会的実践力」を以下のように定義した。

【社会的実践力】

児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

我々が育成を目指す社会的実践力は、地域資源を学習材として横断的で探究的な学習活動が展開されることにより培われていくものである。まず我々は、社会的実践力が様々な側面や要素を持ち合わせた資質・能力が螺旋的に関わり合いながら培われていく資質・能力であるとの立場に立ち、社会的実践力を形作っている資質・能力は何かについての検討から着手した。

研究開発指定第1年次(平成29年度)は、各校で検討した「地域創造学で育成すべき資質・能力」を町教育研究所が分析・整理し、育成すべき社会的実践力を構成する資質・能力の分類を3つ(自律的活動力、人間関係形成、社会参画に関する力)と定義し、それに基づき更に細分化した9つの資質・能力を目指す方向性として確認した。

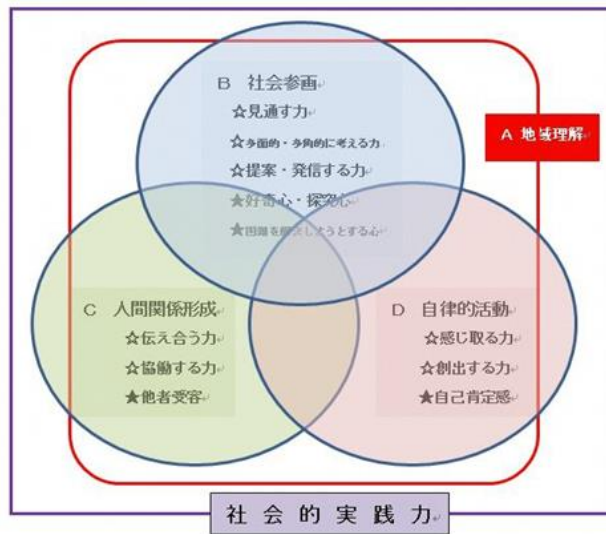
研究開発指定第2年次(平成30年度)は整理した9つの力を基に、新設教科「地域創造学」の指導を開始し、授業実践を基に、社会的実践力として形作られていく様々な資質・能力に関わるさらなる検討を重ね、最終的に【表3-1】のように、12の資質・能力として規定した。これらの12の資質・能力は、「地域創造学においては何を理解して何ができるようになるか」という知識・技能に相当するもの、汎用的スキルに相当するもの、態度・意欲・学びの価値に相当するものに明確化し、知識・技能に相当する資質・能力を「地域理解」、これ以外の11の資質・能力を「社会参画に関する資質・能力」、「人間関係形成に関する資質・能力」、「自律的活動に関する資質・能力」という大きく三つの側面から分類した。「地域理解」以外の11の資質・能力については、汎用的スキルに相当するもの(☆で表示)として七つの資質・能力(見通す力、多面的・多角的に考える力、提案・発信する力、伝え合う力、協働する力)を位置付け、態度・意欲・学びの価値に相当するもの(★で表示)として四つの資質・能力(好奇心・探究心、困難を解決しようとする心、他者受容、自己肯定感)を位置付けた。

併せて、地域創造学において育成を目指す社会的実践力は、それぞれ独立して育成されるものではなく、地域理解の資質・能力と相互に関連付けられ、重なり合いながら育成される資質・能力として定義し、地域創造学で育む社会的実践力を形成している資質・能力の関連を【図3-1】のように示した。

【表 3 - 1】 社会的実践力を形作る資質・能力

社会的実践力	A 地域理解		他教科等との汎用性	
	B 社会参画に関する力	☆見通す力		
		☆多面的・多角的に考える力		
		☆提案・発信する力		
		★好奇心・探究心		
		★困難を解決しようとする心		
	C 人間関係形成に関する力	☆伝え合う力		
		☆協働する力		
		★他者受容		
	D 自律的活動に関する力	☆感じ取る力		
		☆創出する力		
		★自己肯定感		

【図 3 - 1】 12の資質・能力の関連



【表 3 - 2】 は、社会的実践力を構成する資質・能力の分類とともに、12の資質・能力のそれぞれについて、具体的に示したものである。

【表 3 - 2】 社会的実践力を構成する資質・能力の分類

【社会的実践力】児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力		☆ 汎用的スキル	★ 態度・意欲・学びの価値
A 地域理解 自分たちの地域の歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割等を捉える。			
B 社会参画に関する資質・能力 「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りや地域にある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりに関する提案・発信に関する資質・能力	1 ☆見通す力	【☆見】	自分や集団にとっての課題や問題を発見し、その解決方法を見いだす問題発見力。情報を適切に活用する力。目標の達成に向かって解決の道筋を見通し計画する力。
	2 ☆多面的・多角的に考える力	【☆多】	根拠を明確にしなが様々な見方や考え方で検討する力。批判的思考力。考えや解釈の妥当性を考える力。予測し判断する力。
	3 ☆提案・発信する力	【☆提】	地域への愛着を持ち、よりよい社会づくりに向けた取組を提案する力。解決策や考えたことについて効果的な発信方法を考える力。新しい視点や価値観を生み出す力。
	4 ★好奇心・探究心	【★好】	身の回りや地域の事象に興味関心を持つ態度。もっと知りたいと思う心。知りたいことや解決したいことをみつけようとする姿勢。
	5 ★困難を解決しようとする心	【★解】	失敗してもあきらめずに挑戦しようとする心。集団の仲間とともに困難な場面に直結しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする姿勢。
C 人間関係形成に関する資質・能力 学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力することに資質・能力	1 ☆伝え合う力	【☆伝】	調べたことや自分の考えを伝える力。視覚的に伝え方を工夫する力。気持ちや感じたことなどを伝える力。双方向的に伝え合う力。
	2 ☆協働する力	【☆協】	目標達成に向かって、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力。
	3 ★他者受容	【★受】	多様な他者の考えや価値観、立場を受け入れる態度。相手を尊重したり敬意を抱いたりする心。
D 自律的活動に関する資質・能力 自分自身の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや活動を推進することに資質・能力	1 ☆感じ取る力	【☆感】	自己の現在の姿を見つめる力。考えや発想、思いを自分自身で捉えたり、捉え直したりして、これからの自分の学びや活動をよりよいものに調整しようとする力。
	2 ☆創出する力	【☆創】	出会う「ひと・もの・こと」に触れて面白さや楽しさ、よさを感じ、自分なりに表現する力。新しい表現の仕方を生み出したりする力。
	3 ★自己肯定感	【★肯】	学びの過程や活動を省察したり、最後までやり遂げた達成感を味わったりしながら自分のよさを捉える心。自分の可能性を前向きに受け止め、より高いもの・よりよいものを目指して取り組もうとする態度。

② 社会的実践力の系統表を基にした滑らかな学びの接続について

本町における一貫した教育課程の編成をとおして、目指す資質・能力を育成していく上での最も重要な考え方の一つに、子どもたちの発達段階を踏まえ、接続学年の系統性を大切に、育ちと学びを滑らかに接続していくことが挙げられる。そこで、地域創造学の特性を生かし、教科横断的な視点から、校種間、異校種間の接続を図ることにより、着実に社会的実践力が育まれていくよう、発達段階を保育園の年長児も含めた五つのステージのまとまりで編成した。

- ・ 第1ステージ：保育園年長児、小学校1年、小学校2年
- ・ 第2ステージ：小学校3年、小学校4年、
- ・ 第3ステージ：小学校5年、小学校6年、中学校1年
- ・ 第4ステージ：中学校2年、中学校3年、高等学校1年
- ・ 第5ステージ：高等学校2年、高等学校3年

さらに、12年間をとおして、町全体で目指す子どもたちの育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学で育てたい資質・能力の確実な育成に向け、本研究開発の根幹となる社会的実践力の系統表を作成し、五つのステージにおける社会的実践力について、その系統性を明らかにした

【表3-3】。この表に示したものは、各ステージにおける発達段階に応じた学びの様相としてまとめているものであり、到達目標という意味合いというよりは、子どもたちの学びの姿を目安として整理したものである。研究開発指定第3年次（令和元年度）からは、これらの資質・能力及び系統表に基づいて授業実践を進め、第5年次（令和3年度）末までの3年間の取組における成果や課題、実践からわかってきた児童生徒の実態等に応じて、さらに12の資質・能力及び系統表の見直しを図った。具体的には、自律的活動のための要素としての「メタ認知」と「調整力」を適切に評価していくために、現行の資質・能力である「感じ取る力」を「自己を見つめる力」に、「創出する力」を「調整する力」に改訂した**【表3-4】**。

③ 地域資源を学習材とした系統的な学びの在り方について

【地域創造学の目標】

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

上記の目標にもある通り、地域創造学においては、住田町及び近郊地域社会に溢れる地域資源を学習材にして、小・中・高の児童生徒が、探究的な学習活動を意図的・計画的に行っていく。「意図的」とは、その時期だからこそ学ぶ意義や価値が大きい学習内容を、ふさわしい学びのステージに位置付けることである。「計画的」とは、学習内容のつながりや学習方法、児童生徒の資質・能力の系統性を吟味して位置付けることである。具体的な学習内容に関しては、以下のようなものが例として考えられる。

- ・ 住田の産業を通してこれからの町づくりを考え、発信する学習
- ・ 住田町のよさや抱えている課題を学び、実践的な行動を通して地域へ貢献する学習
- ・ 住田固有の有形無形の文化遺産や、先人の残した文化的業績の価値を享受する学習
- ・ 住田と世界のつながり等に目を向ける国際理解に関する学習

上記に示したものは、あくまで数多く考えられる具体例の中の一部である。本研究開発の根幹である社会的実践力の系統表を基に、町全体で目指す子供たちの育ちの姿を俯瞰しながら、小・中・高の各ステージにおいてどのような学習を位置付けることが系統的な学びにつながるのかについてを吟味し、教師が意図的に指導計画に位置付けていく。

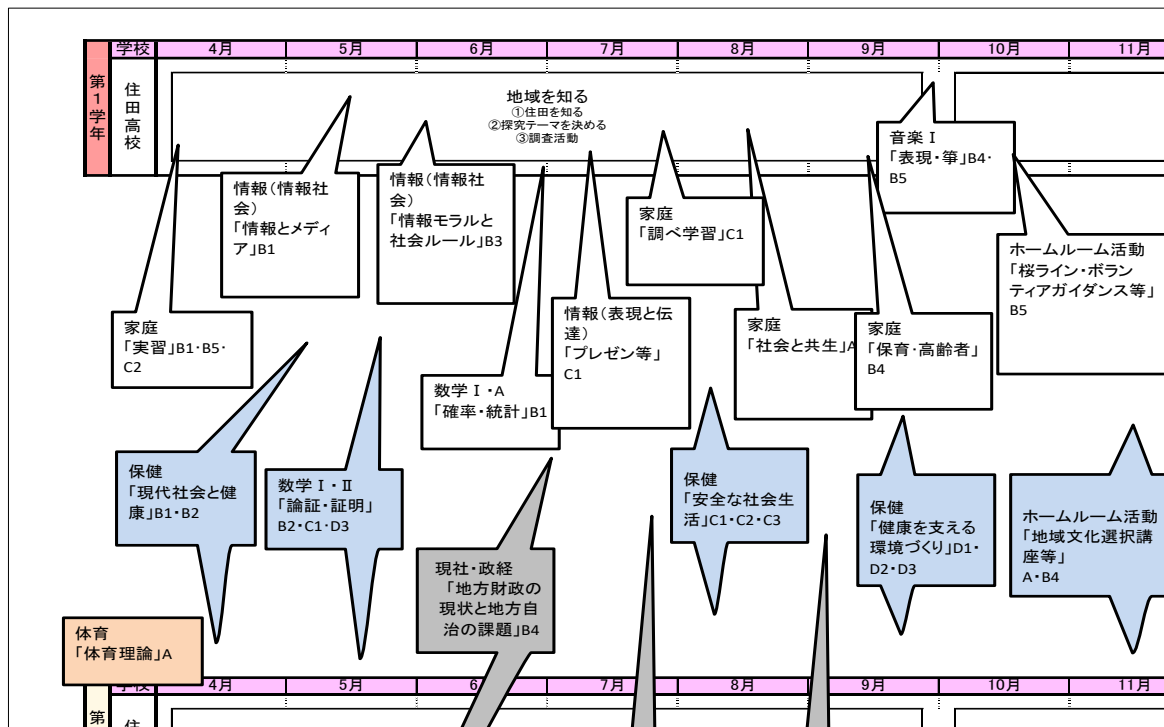
④ 単元計画及び学習指導要領解説地域創造学編について

研究開発指定第3年次（令和元年度）から、小学校から高等学校までの全ての校種が、社会的実践力の系統表を基に作成した単元計画及び学習指導要領解説地域創造学編に基づいて授業を進めた。特に、小・中学校における単元計画では、それぞれの学年に「共通単元」を設定し、二つの小学校の児童・生徒同士の交流場面の創出にも取り組みながら、実践を重ねている。

⑤ 地域創造学で育む社会的実践力と各教科等で育む資質・能力の関連について

地域創造学で育む社会的実践力を支える資質・能力のうち、「B 社会参画に関わる資質・能力」、「C 人間関係形成に関わる資質・能力」「D 自律的活動に関わる資質・能力」の11の資質・能力（汎用的スキル及び態度・意欲・学びの価値）は、各教科等においても育まれる関連能力である。そのため、地域創造学を中核として育成しつつも、各教科等の学習においても関連性を捉えながら培っていく【表3-5】。

【表3-5】住田高等学校 第1～第3学年 地域創造学教科関連検討表（一部抜粋）



(2) 地域創造学の学習指導について

① 探究のプロセスの往還を意識した指導方法の在り方について

将来遭遇する様々な問題場面においては、簡単に解決策が見出せないような課題についても、子どもたちが主体的な姿勢で、他者と協働しながら解決を目指していく資質・能力を育成できるようにすることが重要である。本町においては、学習活動をとおして資質・能力を育成できるよう、これまでの研究実践において、子どもたちにとってよりよい探究のプロセスを探ってきた。

町内の児童生徒の探究活動の実態を基に、収集した情報や体験活動等から得た知識や考えを具体的に整理したり、分析・考察したりする過程を一層重視する必要があると判断したことから、研究指定二年目から、試案として「①課題の設定、②情報の収集、③アイデアの拡散と収束、④アイデアの具現化、⑤改善、⑥まとめと振り返り」という六つのプロセスを設定し、児童生徒の探究活動が質的に深まっていくよう、発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開した【表3-6】。

また、各プロセスでの児童生徒の学びの姿を具体的に挙げて、全教職員で児童生徒の探究的

な学習活動での学びの様相を共通理解できるようにした。

【表3-6】平成30年度の実践において活用した地域創造学における基本の探究のプロセス

① 問題の理解	② 情報収集	③ アイディアの 拡散と収束	④ アイディアの 具現化	⑤ 改善	⑥ まとめと 振り返り
<ul style="list-style-type: none"> ・見る、聴く ・理由や根拠を問う ・気づく ・共感する 	<ul style="list-style-type: none"> ・調べる ・整理する ・分析する ・課題を焦点化する 	<ul style="list-style-type: none"> ・解決案を発想する ・解決策を組み立てる ・解決策を見なおす 	<ul style="list-style-type: none"> ・解決策の実実施計画を構想する ・解決策を実践する 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践を対象の立場から問い直す ・実践に不足していることを付け加える ・実践を修正してやり直す ・実践を繰り返す 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の成果と課題をまとめて発表する ・実践後の自分の思いや願いを伝える ・学びの意味や価値を表現する

平成30年度の実践の結果、一般的な探究のプロセスは、「問題の理解」をスタートとし、「課題設定」、「情報収集」と進んでいくことが多いが、プロセスはいつでも一方向とは限らず、時に「実施・改善」と「見通しを持つ」のプロセスが往還されたり、「問題の理解」からではない段階が起点となって学びが始まったりすることが明らかになった。そこで、令和元年度からは、新たに本町における探究の六つのプロセスを設定し、実践を進めている【図3-2】。児童・生徒の学習状況に応じてプロセスを柔軟に往還させることも、地域創造学の特徴の一つであるといえる。

【図3-2】本町における探究の六つのプロセス



② 探究方法の系統化について

地域創造学においては、探究方法に関しても12年間を見通した系統的な視点を大切にしている。基本的には、第1～第2ステージでは、「地域のよさや魅力（自然、文化、歴史、産業、政策等）」を体感的に理解してそれらをまとめ、発信していくことから始まり、第3～第4ステージからは第1～第2ステージでの「地域理解」を土台としながら「地域の課題」に目を向けた自分なりの「解決方法の提案」等を行い、最終段階である第5ステージにおいては、より実現可能性を意識した、地域活性化に関わる「プロジェクト実践や町への提言」等を行うという流れで学習を進めていく。ただし、これはあくまで基本的な流れであり、このような一方向的な流れにとらわれず、児童生徒の探究活動の深まりに応じて、例えば第2ステージで「地域の課題」に目を向けたり、第4ステージで「町への提言」等を行ったりすることもできるなど、柔軟に指導計画の見直しを行っていけることも、地域創造学の特徴の一つである。

③ 児童生徒の主体性の重視

ア 主体性を生み出す学習課題の設定

地域創造学においては、児童生徒が日ごろから耳目に触れている住田のヒト・モノ・コトなどを学習対象にすることにより、知っているつもりで終わっていたことに気づかせたり、自分や家族に関わる切実な問いとして実感させたりすることで、児童生徒の興味・関心を高め、学習課題の解決に向けて自分事として取り組ませる事を大切にしている。学習課題が自分事になることで、地域創造学以外の時間以外にも、何度も役場や企業等を訪問したり、地域の大人に尋ねるなど、自分の考えや見通しを進んで確かめる姿が期待される。さらにその都度新たな発

見や地域人材の助言等を得られることで、学習課題がより具体的になったり、当初描いていた計画を練り直したりすることも考えられ、より質の高い学習展開につながっていくことが考えられる。

イ 主体的な学びにつながる工夫

(ア) 児童生徒自らが学習結果やアイデアを書き溜めておく

地域創造学においては、小・中・高の12年間継続して使用するポートフォリオ等を活用し、授業でのまとめの振り返りの他に、日常的に浮かんだ課題解決のための方策や方法等のアイデアを蓄積していくことに取り組んでいる。学校では日常的に、学習の成果物を掲示し進捗状況をクラスで共有したり、学習を振り返ったりと、相互に学び合うことが出来るよう配慮している。他者の学習状況も参考にしながら、冷静に自分の取組を俯瞰できる自己評価力がついてこそ、次のステップがより確かな方向へ定まっていくことが考えられる。

(イ) 他者との関わりに重点をおき協働を必須とする

地域創造学においては、他者と協働することの良さを、以下の4点にまとめている。

- ・新しい情報を得て、自分の情報を増やすことができる。
- ・情報が増えたことにより、課題解決に向けて、検討の視点や方法が明確になる。
- ・他者の考え方や行動面等の良さを学び、自分の生き方につなげることができる。
- ・コミュニケーション能力を高めることができる。

なお、ここでの他者とは、校内の児童生徒や教職員に加え、異校種や役場、企業やNPO等、地域で生活するすべての人々を含んでいる。特に、職種や世代等の立場を超えて考えを交流することで、自分にはない見方・考え方を取り入れることができ、やがては児童生徒の見方・考え方もより豊かになっていくことが考えられる。また、協働的な学習を重ねることで、学習内容を一層深めるとともに、児童生徒には新たな見方・考え方が加わり、課題解決や検討の視点や方法も明確になっていくことが考えられる。

④ 地域創造学の特質を生かした学習指導の展開

ア 多様な学習展開（体験活動の重視、異校種の円滑な接続につながる学習）の工夫

地域創造学では、目指す資質・能力を育むため、学びの場を校内に限定することなく、児童生徒の学習課題に応じた体験等を取り入れた体験等を取り入れた学習、役場や企業等の多くの地域人材が積極的に関わる学習等、多様な学習活動を展開する。多様な学習活動が展開される共通点として、次の4点があげられる。

- ・地域人材との交流や体験等の位置づいた学習が展開されること。
- ・児童生徒の学習課題に応じた複線的な学習過程が組み立てられること。
- ・児童生徒の学習課題に応じた学習過程が組み立てられること。
- ・各ステージの特性を生かした学習が展開されること。

以下は、これまでの5年間、各校種で地域創造学に位置付けた体験活動の一部をまとめたものである。

【地域創造学に位置付けた体験活動】

小学校	中学校	高等学校
学校探検、植物の栽培、生き物飼育、町探検、郷土芸能、水生生物調査、キャップハンディ体験、野外活動（種山高原）、町のよさや課題を考える活動	町の魅力を高めるためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践等）、農業体験、職場体験、福祉体験等	インターンシップ、地域文化選択講座、町の課題を解決するためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実

(町内でのリサーチ、まとめ) 等	践)、桜植樹ボランティア、小学生への読み聞かせ活動 等
------------------	-----------------------------

イ 他地域や類似の事例にも学ぶ

地域創造学は、住田及び近郊地域をフィールドに学習するが、住田でみられる事象には、日本各地に共通する課題もあることから、国内や世界の事例からヒントを得るなど、視野を広げて住田を見つめることも重要である。発達段階に応じて、他地域の事例は、なぜ成功したのか、住田との共通点や相違点は何か、住田に活かせることは何か、住田の強みは何かなど、他地域の事例から、住田の良さに気付いたり、郷土への愛着が育まれたりすることも期待される。

ウ 多様な考えを生かす言語活動

地域創造学は、様々な他者との協働的な取組の中で学習が展開され、各教科等における見方・考え方も最大限働かせながら学習課題を追究していく。様々な他者と、相互の考えを理解し合いながら学習を進めるためには、発達段階を踏まえながら各ステージでの充実した言語活動が必要であり、具体的には、他者と伝え合ったり協力したりする場面、多面的・多角的に考える場面や提案・発信する場面、学習の振り返りや自己の在り方を見つめる場面等があげられる。このような場面で教師が児童生徒に意識させたい言語活動の在り方として、次の5点を大切にしている。

- ・情報を正確に取り出し、目的や意図に応じて事実等を整理できること。
- ・事実等を自分の知識や経験等と結び付けて解釈し、自分の考えをもつこと。
- ・意見と根拠、原因と結果等の関係を意識し、表現を工夫しながら、相手に伝えること。
- ・様々な考えの異同（根拠や条件等）を整理して、自分や集団の考えを発展させること。
- ・相手の思いや考えを理解・尊重し、状況に応じた的確に反応できること。

エ 家庭や地域社会との連携による指導

地域創造学は、様々な体験等を含んだ多様な学習活動や学習形態が展開されるため、家庭や地域社会との連携の在り方は非常に重要である。連携する際のポイントとして、次の4点を大切にしている。

- ・教師と地域が、授業のねらいと育てたい資質・能力のイメージを具体的に共有しておくこと。
- ・教師と地域が、綿密な事前打ち合わせを行い、互いに関わる役割を確認しておくこと。
- ・教師と地域が、学習の前後において、児童生徒の学びの現状を共有すること。
- ・地域の大人同士が共通の思いや願いでつながっていること。

4 研究開発の実際

(1) 社会的実践力の系統表等を基にした授業実践について

令和元年度から、社会的実践力の系統表及び年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて、小・中・高5校が育成を目指す資質・能力、指導方法、評価方法等を共有し、12年間の系統性を意識した授業実践を行った。手探りの中で研究を進めていく事は容易なことではなかったが、それぞれの学校で開催する授業研究会に他校の教員が参加する授業研究会の相互交流なども年間15回程度実施して、指導方法や評価方法等について、議論を重ねながら、よりよい地域創造学の学びの在り方の追究を進めた。研究会では、「社会的実践力の系統表に基づいて各ステージでどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきなのか」、「これまでは自分の校種における指導のことしか考えてこなかったが、地域創造学においては、これまでの校種でどのようなことを学んできたのかという視点で系統性を考えて授業づくりをしていく

視点が大切だと感じた」など、校種を越えた視点で指導計画や指導内容について発言する場面が多くみられた。

また、地域をフィールドにした探究活動を行った児童生徒からは、「町を探検したり調べたりすることが楽しい」、「さらに住田町がよいところに思えてきた」、「もっと地域のことを調べて、知らない人に教えてあげたい」、「課題を解決するためにこんな資料が欲しい」等、各ステージ段階に応じて、様々な声が出されるようになった。

(2) 社会参画の資質・能力を育んでいく系統的な取組について（児童生徒の実践から）

地域創造学においては、目指す資質・能力の中に「社会参画」を位置付けており、第1～第2ステージでは、「地域のよさや魅力（自然、文化、歴史、産業、政策等）」を体感的に理解してそれらをまとめたり、発信したりしていくことから始まり、ステージが進むにつれて「地域理解」を土台としながら「地域の課題」に目を向けた自分なりの「解決方法の提案」等を行い、最終段階においては、より実現可能性を意識した、地域活性化に関わる「プロジェクト実践や町への提言」等を行うという流れで学習を進めていくことを基本としている。これまでの約2年半においても、各ステージの段階における「社会参画」に関わる多くの実践が見られた。ここでは小・中・高それぞれの実践を一つずつ取り上げる。

① R1 世田米小学校第6学年 単元名「考えよう 私たちの未来」より

【住田町役場で町の取組について探究活動を行う児童の様子】



第3ステージにおける、住田町の「町づくりの取組」を題材とした実践である。これらの児童たちは、住田町の「町づくりの取組」として特色の見られる「農業」、「林業」、「子育て支援」、「観光」、「情報ネットワーク」の五つの取組に着目し、主体的に探究を進めた。この実践の特徴として、段階ごとの児童の主体的な探究活動を大切にしていたことが挙げられる。この単元は、「取組のよさ」についての探究、「取組の課題」についての探究、「これから考えられる取組」についての探究の三段階に分けられていたが、特筆すべきは、それぞれの段階において全て役場担当者を訪問してフィールドワークを実施したことにある。さらに、それぞれの段階でのフィールドワークにおいて、ただ質問等を行うのではなく、事前学習において「よさ」、「課題」、「これからの取組」を自分たちなりに突き詰めて考えた上で、臨んでいたことにある。そのことによって、探究段階が進むにつれて、役場担当者との議論が明らかに深まっていき、最終的には、自分たちなりに「これから町が行っていくべき取組」をまとめ、発表することができていた。教師とゲストティーチャーとの綿密な打合せ、事前学習の時間の確保や探究のプロセスの往還等の地域創造学の特色を生かした、第3ステージ段階での社会参画に関わる貴重な実践例であると捉えられる。

② R1 世田米中学校第3学年 単元名「プロジェクト実現に向けて行動しよう！」

○プロジェクト名「住田の食材を生かして給食献立をつくろう」

世田米中学校3年生2名は、住田の食材を生かして給食献立をつくるプロジェクトに取り組んだ。これらの生徒たちは、「住田町では様々な食材生産が行われているが、自分たちの同世代はそのことになかなか気づくことができない」ことを課題としてとらえ、その食材を生かした献立づくりを通して、同世代にそのことに気づかせ、住田のよさをとらえさせるねらいでこ

のプロジェクトを設定した。生徒たちは住田町で作られている食材調べから情報収集をスタートし、その食材を使った献立や料理の調理方法までを考え、町の給食センター栄養教諭にオリジナル給食として実際に学校で提供することができないかを提案した。最終的には、栄養教諭との何度もの協議の結果、生徒たちが考えた献立が町内の学校給食の献立として採用された。自分たちが興味・関心を持った「住田の食材」をテーマにして、地域を盛り上げていくために自分たちに現実的にできることは何かについて突き詰めて考え、プロジェクトを主体的に進めていったことがうかがえる実践であると捉えられる。

【調理方法を探究する生徒と学校給食に採用された献立】



(詳細は別冊資料参照)

③ R2～R3 住田高校第2～3学年 単元名「地域への貢献を考える」

○プロジェクト名「外国人も暮らしやすい町に」

住田高校の2年生が、自らの海外研修での経験や、他校生徒のプロジェクトとの交流から、気仙地域の外国人の暮らしやすさに着目してプロジェクトを進めた実践例である。この生徒は、まず住田町内の企業の協力を受け、外国人技能実習生へインタビューを実施したり、近隣の自治体へ調査をしたりすることで、外国人と日本人の交流の場が少ないこと、外国語対応の「ゴミ分別表」がないことを課題として抽出した。そして外国人にとっても住みやすい町にするためには、この状況を変えなければならないという思いの基に、他自治体の先進事例を学び、外国語版のゴミの分別表を作成するために活動を進めた。

分別表を完成させた生徒は、その後「プロジェクト発表会」で自身の取組についての発表を行い、参観していた町役場関係者の協力のもと、そのごみ分別表が、令和3年度末に町内の5カ所のごみステーションに設置されることとなった。この生徒は今年度もプロジェクトを継続し、設置されたごみ分別表をさらに外国人にとって見やすく、活用しやすいものにするための活動に取り組んだ。そして、令和3年12月には、地域の外国人へのヒアリング等も踏まえて改良版のごみ分別表を完成させ、役場町民生活科に改良版の設置を提案した。地域創造学の第5ステージにおいては、実現可能性を踏まえた上で、自分たちなりのよりよい地域の在り方を提言していくことを目指している。この実践は、生徒のプロジェクトを地域の大人が本気で受けとめ、実現に至ったものである。地域創造学において「社会参画」として位置付けている社会的実践力に関わる実践例であると捉えられる。



(詳細は別冊資料参照)

(3) 探究のプロセスの往還に関わる生徒の実践から見てきた指導の在り方について

地域創造学では「①問題の理解、②課題設定、③情報収集、④計画・見通し、⑤実施・改善⑥まとめ・振り返り」というプロセスが発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開している。ここでは、令和元年度からの住田高校生の2年間の実践例を取り上げる。

○プロジェクト名「歌プロ～住田の名所を歌にする～」

住田高校2年生7名（R1当時）は、オリジナルの住田町の歌を作るプロジェクトに取り組んだ。まず、「①問題の理解」として、住田町の人口減少や高齢化が進む現状を取り上げ、「②課題設定」として住田を活気づけ、今よりも明るい住田にしたいという願いのもとに、住田町のいいところがたくさん詰まった歌を作ろうという課題を設定した。「③情報収集」として、自分たちの主観だけでなく、客観的に住田のよいところをとらえ直すために、校内や町内の小・中学校の生徒たちを対象にアンケートを行い、それを基に歌をつくり、完成したら歌に振り付けもつけて保育園や高齢者施設を訪問するという「④計画・見通し」を行い、「⑤実施・改善」の段階に進んだ。歌詞作り及び曲作りに関しては、音楽科教師と協働して進めて完成させた。



（詳細は別冊資料参照）

しかし、新型コロナウイルス感染症の広まりから、当初計画していた高齢者施設等を訪問することが困難な状況となり、計画の見直しが必要となった。「どうすれば自分たちが作った歌を地域に届けられるのか」、そう考えた生徒たちはもう一度計画に立ち返って議論を重ね（情報収集）、最終的には「歌詞に込めた住田の自然風景や振り付けをつけて歌うプロモーションビデオを制作し、地域に配布する」という計画の見直し（計画・見通し）を行った。そして、令和2年度9月に、2年越しの思いが結実し、プロモーションビデオが完成し、地域の各所に配布された。町主催のイベント等でもバックミュージックとして活用されるなど、様々な場面で生徒たちの思いが地域住民へ届けられることとなった。

本事例からは、生徒たちが自分たちなりに地域のよさや抱える課題を理解した上で、自分たちが興味・関心を持った題材（歌）を基に課題を設定し、自分たちに現実的にできることは何かについて突き詰めて考え、探究のプロセスを往還しながらプロジェクトを主体的に実践していったことが推察される。改めて地域創造学で大切にしている柔軟にプロセスを往還させる指導の在り方の重要性を再認識させられた。

しかし、このような探究のプロセスの往還に関わる事例に関しては、高校生段階に限ったことではなく、小学生や中学生のステージ段階においてもみられたことである。上記の「歌プロ」の事例も含め、そのような事例には共通して、教師が一方的な探究のプロセスを押し付けるのではなく、探究段階に応じて粘り強く生徒に寄り添いながら、「問い」を通して新しい視点に気づかせるような支援を行っていたことが明確になってきた。このような実践例の共有を通して、教師は児童生徒の探究活動を力強く誘導するのではなく、横に寄り添って支え、児童生徒の主体的な活動に対して必要に応じて適切に支援していく、いわゆる「伴走者」としての考え方が地域創造学における指導方法の土台であることを町全体で再確認した

（４）児童生徒同士の校種間交流について

地域創造学においては、町全体の小・中・高で目指す資質・能力や内容、指導方法及び評価方法を共有している利点を生かし、単元の内容に応じて積極的に校種間交流を行っている。それぞれの小学校の第2ステージの児童がそれぞれの「地域のよさ」を発表して深め合う同校種間交流や、小学生が中学生のプロジェクトを、さらには中学生が高校生のプロジェクトを参観する異校種間交流が何度も行われている。同校種間で学びを深め合うことはもちろんのことであるが、異校種の先輩や後輩と共に学び合うことも、児童生徒の学習意欲に前向きな効果を与えるものと考えられる。

【世田米小学校・有住小学校

【有住小学校・有住中学校

【世田米中学校・住田高校

合同授業「いいな・すごいな発表会」】

合同授業 「プロジェクト交流会」】

合同授業 「プロジェクト交流会」】



(5) 地域との協働について

地域をフィールドにした学びである地域創造学において、地域との連携は不可欠である。令和元年度に地域創造学を本格実施してから、これまでの約3年間の実践において、延べ約300名の地域の方々に、ゲストティーチャーやアドバイザーとしてご協力いただいた。児童生徒にとっては、地域の方々の生の声を基に学びを深める貴重な機会となっている。

【地域をフィールドにし探究活動における様々な場面でゲストティーチャーの話をきく児童生徒】



令和元年度から年1回実施している地域創造学協力者会議においては、地域の方々から学校に対して、「何より子どもたちに地域のことを知ってもらえるのがうれしい」、「事前学習をさらに充実させた方が、ゲストティーチャーとしてのアドバイスがより意味のあるものになる」、「どのような力を育成しようとしているかについて授業前に担任の先生と共通理解を図りたい」、「自分たちが教えたことを、子どもたちはどのようにとらえ、その後どのようにまとめたのかについて、ぜひ教えてほしい」など、切実な意見が出された。地域創造学を通して、学校だけでなく、地域全体で子どもたちを育てていくという意識の表れであると捉えられる。

【地域創造学協力者会議の様子】

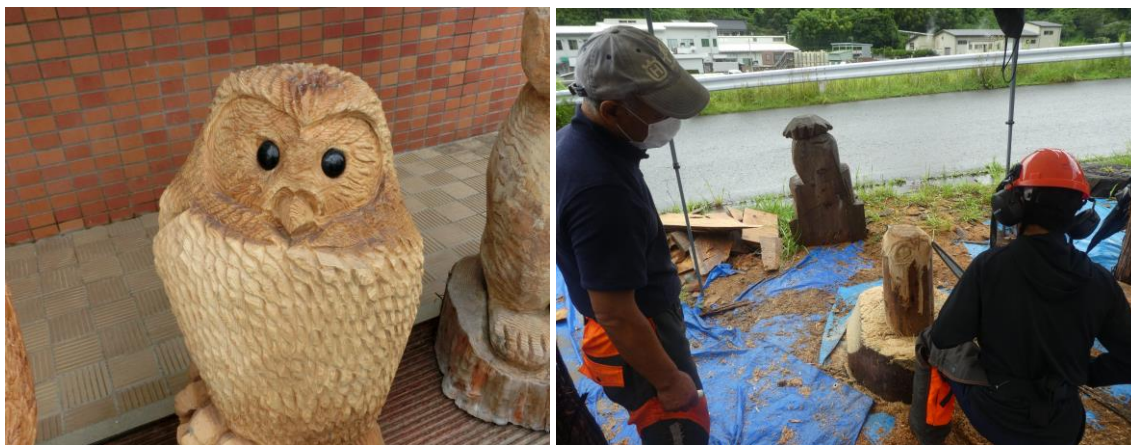


また、地域の報道機関（町営ケーブルテレビ、新聞）との連携も、地域創造学の取組を町全体で共有していく意味で大きな役割を担っている。それぞれの媒体における小・中・高の日常の取組の報道による地域の反響は大きく、「子どもたちの取組の様子をテレビで見られることが楽しみだ」という声が多く聞かれる。昨年度は町営ケーブルテレビにおいて、特定の生徒のプロジェクトを詳細に追いかけた番組制作も行っていただいた。地域全体で子どもたちの社会的実践力を育てていく上で、子どもたちの取組を地域で共有していく事は大前提であり、このような報道機関との連携は本町のような小規模中山間地域ならではの、貴重なツールであるといえる。

(6) SNS の活用

令和3年度から、児童生徒が考えた地域の魅力や課題解決のプランを、「地域創造学」フェイスブックページを活用して発信する活動にも精力的に取り組んだ。

【中学校の生徒が地域の魅力としてフェイスブックで発信したチェーンソーアート】



(7) 教育研究所を母体とした「地域創造学」を柱とする教育課程推進に向けた体制づくりに向けて

①教育研究所各部会での取組

4つの部会では、各小・中学校長が部長を務め、部会の運営に当たった。

【学校カリキュラム検討部会】

I 研究の目的

地域創造学及び各教科・領域等において「社会的実践力」を育むために、「地域創造学」を据えた教育課程の編成の在り方を検討する。

II 研究の内容

- 1 地域創造学で育成したい資質・能力と各教科・領域との関連を明らかにした教育課程を編成・実施し、次年度の学校運営計画書を作成する。
- 2 地域創造学の各単元の学習内容と関連が強い教科・領域について整理し、単元計画への表記方法の見直しと改善を行う。
- 3 地域創造学の教科書作成について検討する。
- 4 授業実践を基にした地域創造学と各教科との関連について確認する。

III 研究の推進

- ◇ 4月26日(月) <第1回部会>
組織づくり、ねらいの確認今後の研究推進の方向性の確認等
- ◇ 7月7日(水) <第2回部会>
単元計画の修正についての確認、地域創造学教科書作成各教科との関連についての確認①
- ◇ 11月19日(金) <第3回部会>
地域創造学教科書作成、各教科との関連についての確認②
- ◇ 1月20日(木) <第4回部会>
研究の振り返りと今後の研究推進にあたって

IV 研究の具体

- 1 地域創造学教科書作成について

(1) 目的

- ①児童生徒が主体的に探究活動を行っていくための資料とする。

②持続可能な取組につなげていくため。

(2) 内容

- ①探究活動の進め方の実践例（学習シート・写真等）
- ②今までのプロジェクト活動の実践例（学習シート・写真等）
- ③具体的な内容については、同校種ごとに来年度検討する。（ステージ・学年・単元等を絞る・単元計画の大改訂に対応等）
- ④将来的には、探究活動の手引き等を記載する。
- ⑤新しい実践や単元計画の改定等に基づき、内容を更新・改定する。

(3) 年次計画

①R 3年度

- ・高校：教科書（試案）の作成（住田高・事務局）
- ・小中学校：資料（学習シート・写真等）の収集・整理

②R 4年度

- ・高校：教科書（試案）に基づく実践・教科書改善
- ・小中学校：教科書（試案）の作成

③R 5年度・R 6年度

- ・全校種：教科書（試案）に基づく実践・教科書改善

2 授業実践を基にした地域創造学と各教科との関連について

(1) 教科との関連

- ①高校でのプロジェクト内容や成果物、振り返りシート等で確認

(2) 「特別の教科 道徳」との関連（小学校・中学校）

- ①地域創造学の中に溶け込ませている内容項目【相互理解・寛容】・【伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度】・【自然愛護】について、成果物や振り返りシート、作文や発表原稿資料等で確認

V 成果と課題

(成 果)

○各校では、今年度もコロナ禍で多くのことが制限される中、教務主任と研究主任・学年主任・教科担任等が連携を深めながら、地域創造学を据えた教育課程を編成・実施することができ、今までの成果や改善点を確認しながら学校公開も終えることができた。

○地域創造学の各単元の学習内容と関連が強い教科・領域について整理し、単元計画への表記方法の見直しと改善を行うことができた。

○地域創造学教科書作成について、見通しを持つことができた。高校版の地域創造学教科書（試案）については、今年度中に作成する予定。

○地域創造学と各教科との関連について、高校でのプロジェクト内容や成果物、振り返りシート等から、各教科における知識・技能、見方や考え方等を働かせながら学習課題を追及していることが確認できた。また、地域創造学の内容に溶け込ませている「特別の教科道徳」の内容項目【相互理解・寛容】・【伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度】・【自然愛護】について、地域創造学の実践の中で児童生徒が価値理解を深めていることが成果物や振り返りシート、作文や発表原稿資料等で確認することができた。

○各校での研究を推進しながら、同校種間連携及び異校種間連携も深めることができた。

(課 題)

△単元計画の大改訂及び今後のコロナの状況等に応じた教育課程の編成や計画的な実施について、さらに情報交流を深め、検討すること。

△地域創造学の教科書作成について、計画的に推進していくこと。

△地域創造学と各教科との関連について、分析・探究していくこと。

△同校種間・異校種間でのよりよい連携の在り方等について、さら検討していくこと。

VI 今後の研究推進にあたって

☆今後の研究開発計画全体を見通すとともに、今までの成果・改善点をしっかりと確認しながら、教育課程の編成や計画的な実施について、さらに情報交流を深め、検討すること。

☆単元計画の大改訂に関わっては、学習指導検証部会と連携を図り、確認していく。

☆中学校における教育課程特例変更（国語科・社会科時数減）に伴う教育課程の編成・実践を確実に推進すること。

【評価検証部会】

I 研究の目的

地域創造学の実践に伴い、評価の在り方（パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価等）について検討し、他部会や地域と連携して、実践モデルを提案する。

II 研究の内容

- 1 児童生徒の学びの過程を蓄積するポートフォリオやノート等を活用した多面的な評価の在り方を提案する。
- 2 単元において、子どもたち自身の「ふり返り」や「メタ認知」の効果的な場を設定する。
- 3 指導者と子どもたちが目標（ルーブリック）を共有しながら、自己の学びを省察し、進歩の状況について子どもたちが実感できるようなルーブリックを作成する。

III 研究の推進

- 1 研究員として各校研究主任を委嘱し、研究にあたる。
- 2 評価方法の検証や評価項目の設定にあたり、他部会と連携して研究を推進する。

IV 今年度の評価検証部会について

- 4月26日（月） 教育研究所第1回全体会
第1回部会：組織の確認 今年度の研究内容の確認 活動計画
- 6月25日（金） 第2回部会：各校の実践交流
- 7月7日（水） 第3回部会：学校公開研究会に向けての評価の実際について
- 9月29日（水） 第5年次学校公開研究会
- 1月20日（木） 第4回部会：研究の振り返り
- 2月18日（金） 教育研究所第2回全体会

V 研究の成果と課題

1 成果

- (1) パフォーマンス評価検証の実践内容について、各校の資料を確認しながら交流できた。
- (2) ポートフォリオの活用方法について、具体的な方策を検討し共有できた。
 - ・ 何をどのように蓄積するか（目的）
 - ・ 運用の考え方を明確にして実践
 - ・ 児童生徒に取捨選択させる場の設定を推奨
 - ・ ふり返りの効果を各校の様式で検証
- (3) 学校公開の評価に関する添付資料や内容について、各校で共通認識をもって取り組めた。
 - ・ ルーブリックの提示方法や活用場面の共有（単元のヤマ場、身につけさせたい資質能力）
 - ・ 12の評価基準は1年間で網羅し、単元の中の重点を明確にして焦点化
 - ・ ☆（汎用的スキル）と★（情緒面）は単元の中で偏らないようにし、ルーブリックにはどちらも表記

2 課題

(1) ポートフォリオ(今年度は振り返りシート)の活用や運用について、探究のプロセスのどの場面かを教師と子どもが意識して学習を進めることができていなかった。

また、ワーキングポートフォリオからパーマネントポートフォリオへのファイリング方法を考え、ICTの活用が進められなかった。

(2) 各単元において資質能力を絞り、単元の重点をより明確にする方向に進めたが、12の資質能力についてどの単元で重点として評価を行うかを検証するには至らなかった。

(3) ルーブリックを活用したパフォーマンス評価について、教員での検討を進めることができたが、子どもたちとの共有を図る点については不十分であった。

VI 令和4年度の研究の方向性

1 探究のプロセスを意識したポートフォリオやICT機器の活用の検討。

2 12の資質能力と新たな単元計画の評価項目や内容検討(他の部会との連携)

→ 指導案と実践を通して積み重ねていく。

3 ルーブリックを活用したパフォーマンス評価に関して、児童・生徒とのよりよい共有の在り方を検討する。

【学習指導検証部会】

I 学習指導検証部会の研究の目的と内容

1 研究の目的

(1) 教科の指導方法を多面的・多角的視点から工夫・改善する。

(2) 社会的実践力を育成するために効果的な指導計画を立案する。

① ステージ内、及びステージ間で系統的な資質能力の育成が図られる指導計画

② 校種間での連携を意識した指導計画

③ 各教科等との学習と相互に関連づけられた指導計画

④ 地域のひと・もの・ことの活用や連携を促進して、より豊かで魅力ある学びを構築するための指導計画

2 研究の内容

(1) 児童生徒の探究的な学習活動の充実に向けた、探究のプロセスに基づく多様な授業展開の在り方を探る。

① 児童生徒の主体的な思考を促す指導者の適切な支援の在り方を探る。

② 短期間ではなく、長期間にわたって子どもたちの内面に残り、活用される力を定着させる指導を工夫する。

③ 地域の学習材を意図的・効果的に取り入れた単元計画を作成する。

(2) 単元配列表(試案)及び年間指導計画(試案)に基づく授業実践及び年間指導計画・単元計画の改善を行う。

① ステージ内及びステージ間での学習内容の系統性や反復性、学習方法の積み上げに留意した年間指導計画の単元配列になるよう改善を図る。

② 共通単元の検討を通して、校種間での連携を意識した年間指導計画になるよう改善を図る。

③ 児童生徒の主体的な思考を促し、地域のひと・もの・ことの活用や連携をより促進した単元計画を作成する。

II 今年度の部会の開催について

1 第1回学習指導検証部会 令和3年 4月26日(月) 住田町役場第2会議室

[内容] ア 今年度の部会の研究の計画について

- ・ 地域創造学単元計画の改訂について
 - ・ 各ステージにおける社会的実践力の系統表の改訂について
- 2 第2回学習指導検証部会 令和3年7月30日(金) 住田町役場第2会議室
〔内容〕 ア 各ステージにおける社会的実践力の系統表の改訂作業(1回目)
 - 3 第3回学習指導検証部会 令和3年11月29日(月) 生活改善センター会議室
〔内容〕 ア 各ステージにおける社会的実践力の系統表の改訂作業(2回目)
イ 単元計画表の改訂について
(改訂の方向性とスケジュールについての検討)
 - 4 第4回学習指導検証部会 令和3年12月27日(月) 住田町役場町民ホール
〔内容〕 ア 各ステージにおける社会的実践力の系統表の改訂作業(3回目)
イ 単元計画表の改訂について(改訂作業をする単元の検討)
ウ 研究のまとめについて

Ⅲ 研究の実際

1 地域創造学単元計画の大改訂について

(1) 今年度の改訂作業について

- ・ 今年度は、特に時数の多い体験的な活動や探究的な活動、提案や実践など、各学年の単元計画の柱となる単元2単元程度の作成を行うこととした。
- ・ 1つの単元計画は、4ページの構成を原則とし、以下の構成とした。

1ページ目	「1 単元設定の理由」	「2 単元の概要」	「3 単元の目標」
2ページ目	「4 単元の評価規準」	「5 教科等の関連」	
3～4ページ目	「6 単元の指導」		

(2) 今年度改訂する単元について

ステージ	学年	作成する単元計画その1	作成する単元計画その2
第1 ステージ	小1	自然とふれあう体験的な活動	自分の成長に関わる体験的な活動
	小2	まち探検に関わる体験的な活動	自分の成長に関わる体験的な活動
第2 ステージ	小3	名所や名物に関わる探究的な活動	伝統芸能や伝承活動に関わる探究的な活動
	小4	気仙川に関わる探究的な活動	地域の福祉に関わる探究的な活動
第3 ステージ	小5	森林を生かした産業に関わる探究的な活動	復興・防災に関わる探究的な活動
	小6	まちづくりの取り組みに関わる探究的な活動	地域の歴史に関わる探究的な活動
	中1	地域の人物や資源に視点をあてた探究的な活動	地域の防災に関わる探究的な活動
第4 ステージ	中2	提案・発信に関わる計画の立案と実践	職場体験に関わる探究的な活動
	中3	提案・発信に関わる実践と振り返り	地域の防災に関わる探究的な活動
	高1	自己理解の方法を学び、「自分を知り、地域を知る」ための実践的な活動	
第5 ステージ	高2	自分自身の関心のある分野でマイプロジェクトを立ち上げて行う実践的な活動(1年目)	
	高3	自分自身の関心のある分野でマイプロジェクトを立ち上げて行う実践的な活動(2年目)	

2 各ステージにおける社会的実践力の系統表の改訂について

(1) 4つの資質・能力の分類について

- ・ 基本的に現行のものを活用するようにした。

(2) A～D(12項目)に関する資質・能力とその定義について

- ・ D1「感じ取る力」D2「創出する力」を以下のように変更した。

【現行】**【改訂後】**

D 1 「感じ取る力」 → D 1 「自己を見つめる力」

D 2 「創出する力」 → D 2 「調整する力」

※ 変更の理由

- ・ 現行の「創出する力」は「表現」に関わる内容であり、B 3 「提案・発信する力」と近い。また、「創出」は、思考に関わる資質・能力であるとする。
- ・ Dは「自律的活動に関する資質・能力」であり、自律的活動のための要素としての「メタ認知」と「調整力」が、現行ではD 1に集約されている。自律的活動を適切に評価するためには、分けて表記して評価していくことが望ましいと考える。

- ・ 1 2の資質・能力の定義について、それぞれ2つずつ箇条書きで記述するようにした。

(3) 各ステージにおける社会的実践力の系統表の記述について

- ・ ステージにまたがって記述しているものはなくし、それぞれのステージの一つずつ、育成を目指す資質・能力を位置付けるようにした。
- ・ 育成を目指す資質・能力の記述を短くして、その内容が分かりやすいものとなるようにした。
- ・ 体験的な活動が中心の第1ステージと探究的な活動が中心の第2・第3ステージ、提案・実践が中心の第4・第5ステージの3つのくくりでまとめ、くくりの中である程度内容をそろえて記述し、くくりごとの違いが出るようにした。
さらに、第2ステージと第3ステージ、第4ステージと第5ステージにおいても、上のステージに文言を加え、発達段階の違いが出るようにした。

IV 部会の研究の成果と課題

1 成果

(1) 単元計画の改訂について

- ・ これまで使用してきた単元計画や各校で行われた授業実践を生かしながら、社会的実践力を培う上での各ステージの位置づけ等を明らかにして、単元計画の改訂をすることができた。
- ・ 「単元設定の理由」や「単元の概要」などの新しい項目も取り入れ、より活用しやすい単元計画を作成することができたと考える。

(2) 各ステージにおける社会的実践力の系統表の改訂について

- ・ 社会的実践力の系統表の改訂作業を通して、社会的実践力を構成する資質・能力について見直すとともに、その内容についての吟味を行うことができた。
- ・ 1 2の資質・能力の定義を箇条書きにしたり、各ステージの系統を見直したりすることにより、よりわかりやすく、単元の構成や授業実践に生かしやすい系統表とすることができたと考える。

2 課題

(1) 単元計画の改定について

- ・ すべての単元の大改訂をすることはできなかった。まだ改訂されていない単元計画の作成を進めるとともに、実践を通して新しく作成した単元計画の妥当性を確かめながら、今後も単元計画の改善を進めていきたい。

(2) 各ステージにおける社会的実践力の系統表の改訂について

- ・ 今回改訂した、1 2の資質・能力が、社会的実践力を構成するものとして妥当かどうか、今後実践を通して明らかにしていきたい。特に、発達段階にあったものとなって

【就学前教育研究部会】

I 研究の目的

生涯学習の基礎としての就学前教育における保育・教育の在り方、保育園と小学校との連携について研究を行う。

II 研究の内容

- 1 地域創造学における非認知能力と認知能力のバランスのよい育成を目指すために、幼児教育と小学校教育の円滑な接続が図られるよう、小学校教諭の保育体験、保育士の授業参観等の相互交流を通して、保育園と小学校の連携の進め方を研究する。
- 2 令和元年度に改訂した「すみた幼児教育（保育）プラン」に基づき、保育園での授業実践を行う。
- 3 令和元年度に作成した「スタートカリキュラム」に基づき、小学校での授業実践を行い改善を図る。

III 研究の推進

第1回 5月26日（水）ねらいの確認、研究方法や内容の確認

第2回 12月20日（月）各小学校区の実践のまとめ

第3回 1月31日（月）年間活動のまとめと反省および次年度の活動計画

IV 研究の実際

1 保小連携

(1) 保育士と小学校教諭の相互理解と協働

- ・保育士の授業参観と情報交換会 ○カリキュラムの確認・見直し
- ・小学校教諭の保育士体験と情報交換会 ○授業計画についての連携と学び合い

(2) 保育と地域創造学の関連

- ・第1ステージに向けた幼児教育と学校教育の円滑な接続
～保小それぞれで行った種山学習をもとに園児（年長）を招待した交流会～
「育ってほしい10の姿」と「社会的実践力」の整合性の検証

2 「すみた幼児教育プラン」に基づいた保育園での実践

- (1) 実践例1 未満児と6年生の交流を通して
身近な人や周囲の人への興味関心を高め、自立心や協働性を養う活動
- (2) 実践例2 年長児と小学生のプール遊びを通して
様々な体験を通して仲間とのつながりや規範意識を育てる活動
- (3) 実践例3 園児と小学生のハロウィン交流を通して
友達と一緒に活動する楽しさや豊かな感性による様々な表現力を養う活動

3 「スタートカリキュラム」に基づいた小学校での実践

- (1) 実践例1 1年生と他学年の交流を通して
学校生活への不安、基本的なルール、なめらかな
順応を促す活動
- (2) 実践例2 5年生と年長児の交流を通して
来るべき最高学年としての心構えの育成と同時に、高学年との交流による安心感や期待
感を養う活動

V 成果と課題

1 成果

- 保育士、教諭、保護者の連携を計画通りに進めてきたことにより、双方の思いや願いを共通理解できた。保小連携にとどまらず、保小保連携ができたことは、年長から小1へ上がる子供たちの不安解消や準備に有効であった。
- すみた幼児教育プランの改定を進め、実践してきた。
- コロナ禍においても、なるべく多くの人と接することをとおして、人間関係の醸成や感性、表現力の向上を、目的意識をもって展開していくことの大切さを感じることができた。
- スタートカリキュラムをしっかりと意識し、双方が共通理解のもとに計画的に進めていくことがとても大事であることを改めて認識することができた。

2 課題

- コロナ禍において、新しい生活様式の中で、より効果的で持続的な連携をどのようにして深めていけばよいか。
- 保育園における「すみた幼児教育プラン」の全体構想および年齢別年間指導計画に沿った活動の充実を図っていく必要がある。
- 小学校におけるスタートカリキュラム、および保小連携交流活動計画の充実に向けた活動の見直しを図っていく必要がある。

VI 来年度の計画

- 1 「すみた幼児教育（保育）プランの見直しと実践」
- 2 「スタートカリキュラム」に基づいた実践と見直し
- 3 「保育」と「地域創造学」の関連についての実践と検証

②各学校の研究主題及び主題設定の理由等（令和3年度住田町教育研究のまとめより抜粋：
研究の実際、成果と課題の詳細等は別冊資料に掲載）

【住田町立世田米小学校】

I 研究主題

地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもの育成
～社会参画を視点とした地域創造学の授業の展開を通して～

II 主題設定の理由

1 研究開発課題から

平成29年度より住田町内の小・中・高等学校は文部科学省研究開発学校の指定を受け、「子どもたちに新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力や心の豊かさを育成するため、小・中・高等学校の滑らかな教育の接続を活かして、教科『地域創造学』を新設した場合の教育課程、指導方法及び評価方法などの在り方に関する研究開発」に取り組んでいる。「地域創造学」では、社会を創造していくために必要な「社会的実践力」を身につけ、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指しており、特に小学校段階においては、地域づくりを主体的に創造することにつながる資質・能力の基盤づくりが必要であると考えます。

そのために、地域の環境と関わることを十分に楽しんだり、地域の「ひと・もの・こと」のよさを見つけ親しんだりする経験を通して、地域への興味・関心を高め、地域への愛着を育むとともに主体的に地域に関わることができるようにしていきたいと考えた。

2 本校の教育目標から

本校では、「やさしく」「かしこく」「たくましく」を学校教育目標に掲げている。特に、

本次研究を通して「かしこく」の具体目標である「自分で考えつくり出す子ども」を育てたいと考えている。

地域創造学では、「社会的実践力」を身に付けた児童の育成を目指している。「社会的実践力」とは、「変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力」であり、その力はまさに本校の教育の目指す「自分で考えつくり出す力」と合致する。また、地域創造学において探究的な学習を繰り返す中で、「地域への愛着」や「進んで地域に関わる態度」を育むことは、「やさしく」の具体目標である「なかよく思いやりのある子ども」にもつながるものであると考える。地域創造学の実践を通して、「地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子ども」を育成することにより、学校教育目標の達成を図っていきたいと考えている。

3 児童の実態から

本校の子どもたちは、明るく素直で、様々なことに対して一生懸命に取り組むことができる。自分たちが住む地域を「自然が豊かで住みやすいところ」と感じ、地域の祭りや行事等へ進んで参加する子どもが多い。一方で、地域に対する人々の思いに目を向けたり、地域の未来の姿について考えたりした経験は多くないと思われる。そこで、地域資源を教材として学ぶ体験的・探究的な学習活動を通して、今まで以上に地域に対する理解や愛着を深め、自分たちの生きる地域を含めた未来の社会を創造していくことができる資質・能力を育むことを目指していく。

令和元年度から昨年度まで、「地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもの育成」を主題に、主体的・対話的・探究的な地域創造学の学びとして『見通し』『振り返り』の工夫「学びを深める対話の工夫」「探究活動における言語活動の工夫」に取り組んできた。研究の成果として、児童が活動への思いをもって探究活動に取り組んだり、友達や地域の人との対話から新たな気づきを得て、今まで日常的に接してきたものの意味や価値を考えたりする様子が見られるようになってきている。

今年度は、昨年度までの研究を土台としながら、さらに地域理解を深め、地域の事象の意味や価値、これからの地域の在り方について考えを深めていけるようにしていきたいと考えている。そして、学びの先にある地域への誇りや愛情などをもつこと、地域に主体的に関わりその意味や価値、課題について考え判断することなどの資質や能力の育成を図っていく。

地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもを育成していくために、どのような単元構想や学習指導をしていけばよいか、社会参画を視点とした地域創造学の授業実践やその分析、授業交流等を通して明らかにする。

Ⅲ 研究に対する基本的な考え

1 主題について

(1) 「地域に愛着をもつ」について

「地域に愛着をもつ」とは、子どもたちが、自分が住む住田町を自分にとって大切な場所であると感じ、住田町に誇りと愛着をもつことであるととらえる。そして、そのように感じる理由として「自然を楽しむことができる」「お気に入りの場所がある」「誇れる名所や伝統がある」「人々が幸せに暮らすための取組をしている」等の価値があることをとらえ、根拠をもって地域への思いを表現できるようにしていきたい。

地域への愛着は、地域の事象に何度も関わってよく知ることで徐々に高まるものであり、一単元の中でも、また学年を越え学習課題を変えながら、何度も繰り返して地域の事象と向き合う学びの積み重ねが大切である。子どもが、事象に対して新たな意味を見出したり、その価値を感じたりして、それらのことを表現する姿を、「地域に愛着をもつ」姿と考えている。

(2)「進んで地域に関わる」について

「進んで地域に関わる」とは、子どもが地域を知り、地域の事象について自分の考えをもち、地域とどのように関わっていくかを判断することであるととらえる。低学年では地域との関わりを十分に味わい、「楽しいな」「いいな」「すごいな」と地域のよさを感じることで、高学年では地域の事象の特色や関連、意味や価値を考え、未来への発信につなげていくことを目指したい。地域の「ひと・もの・こと」への理解を深め、身の回りの事象と自分を結び付けて考えたり、地域社会の一員としてこれから何をどのようにすべきか具体的に考えたり、現在及び将来の自分の生き方について考えたりして、地域と自分とのつながりについて思いをもつことを「地域に進んで関わる」姿と考えている。

2 副題について

(1)「社会参画」について

地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもを育成していくためには、地域創造学で育む社会的実践力を構成しているA～Dの資質・能力のうち、特に「B 社会参画に関する資質・能力」の育成に視点をあてていく必要があると考える。それは、社会参画に関する資質・能力は、地域創造学でこそ育みたい資質・能力であり、本町が育成を目指す社会的実践力の中核となるものと考えているからである。

社会参画とは、小学校段階では「地域を知り、これからの地域の在り方を考え、他者と協働してよりよい社会の形成に主体的に関わること」と考えている。特に、各ステージにおける社会参画について、本校では、以下のように考えている。

第1ステージ…地域を知る

第2ステージ…地域と自分との関わりを考える

第3ステージ…地域への関わり方を考える

第1ステージ「地域を知る」とは、学校を中心として地域の様々な事象についての気付きをもとに理解を深めることである。例えば、身近な地域にはどんなものがあり、どんな人がいるのかやどんな活動が行われているのかなどを知ることである。第2ステージ「地域と自分との関わりを考える」とは、地域の事象の事実や実情を理解した上で、そのことを自分はどう思うのか、自分とどう関わっているのかを考えることである。例えば、地域の伝統芸能の意味や伝承する人々の思いや願いを知り、自分は伝統芸能についてどのように思っているのか、これまで自分たちは伝統芸能にどのように関わってきたのか、などを考えることである。第3ステージ「地域との関わり方を考える」とは、地域の現状や課題を知り、児童一人一人が課題意識を明確にもって、地域の在り方や自分は地域にどのように関わっていくべきかなどを考えることである。例えば、住田町の暮らしやすい町づくりのよさや課題を捉え、社会の一員として自分の生活や行動について考えていくことなどである。

(2)「社会参画を視点とした授業の展開」について

「B 社会参画に関する資質・能力」を育成していくためには、地域の実情を理解し、地域の問題や課題を自分事として捉えることができる「社会参画を視点とした授業」の展開が必要であると考えられる。具体的には、社会参画を視点とした授業の展開とは、地域はどのようなになっているのかを知ることができるようにしたり、地域と自分との関わりを考えることができるようにしたり、地域への思いや願いをもち、どのように関わっていくかを考えたりする学習を展開していくことと捉えている。

このような地域の「ひと・もの・こと」に関わった体験的な活動や横断的で探究的な学習活動の中で、様々な角度から地域の物事を捉えて自分の考えをまとめ、地域における自分の役割について思考・判断し表現することで、一人一人の地域理解が深まるとともに、地域の

事象の意味や価値、これからの地域の在り方などについて考える力等、段階ごとに社会的実践力の核である社会参画に関する資質・能力が育っていくと考える。

IV 研究の仮説

地域創造学の教育過程において、地域素材を題材とした学習活動を通して次の手立てを講ずれば、地域に愛着をもち、進んで地域に関わる児童が育つであろう。

- ・社会参画に関わる資質・能力を育むための「問い」の工夫
- ・体験的な活動の充実

【住田町立有住小学校】

I 研究主題

生きて働く社会的実践力の育成をめざして
～よりよく伝え合い、深く学び合うための学習活動を通して～

II 主題設定の理由

1 本町の地域創造学の目指す姿から

本町は、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、自立して生き抜く力を身に付け、他と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することができる人材の育成を目指し、小学校から高等学校までが一貫して新設教科「地域創造学」を実施するために、12年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発を行う。

町の9割を山林が占め、自然豊かな環境にある住田町は、製鉄のような森林資源とのつながりや、砂金採取のような気仙川とのつながりなど地域特有の資源を生かし、先人たちが苦難を重ねながら発展してきた歴史がある。私たちは、その魅力ある地域素材を生かし、学習できる恵まれた環境にある。

住田町の「ひと・もの・こと」に関わり、自らが暮らす地域に愛着をもつことは、地域の課題に対して自分事として目を向け、主体的に考えるきっかけとなる。

地域の環境や課題を学習材にし、学習者が、体験活動を通じて地域づくりを実際に行う「主体者」として考え、伝え合い、学び合いながら、提案・発信しようとする経験を積むことは、将来社会を創造しようとする際の重要な力「社会的実践力」の習得につながると考える。

2 本校児童の実態から

本校の児童は、これまで、住田ならではの地域素材を生かし、自然の偉大さや美しさ、不思議さに感動しながら、楽しんで学習してきた。それらの学習活動の中で、与えられた課題に真面目に取り組み、アドバイスを素直に受け入れて課題解決に向かおうとする前向きな姿が見られる。しかし、その反面、自ら課題を見出し、思いや願いの実現や解決に向けて粘り強く追求することが難しいという実態が浮かび上がっていた。また、自分が経験したり、体得したりした事を他者に伝えたいという思いはあるものの、伝えたい対象を明確にし、伝えたい事柄を適切な方法やよりよい表現を選んで伝える力が十分に身に付いていないという実態が見られた。そのため、昨年度は、自ら思いをもち、主体的にかかわる児童を育成するために、単元や授業の導入と振り返りの工夫を重点にして研究に取り組んできた。その結果、児童が自分の思いをもって探究活動に取り組んだり、友達や地域の人とのかかわりから新たな気付きを得て今まで日常的に接してきたものの意味や価値を改めて考えたり、見つめ直したりし、学習の面白さや学習を通して身に付けた力を実感できるようになってきているところである。

今年度は、昨年度までの研究を土台としながら更に児童の思いや願いを大切に、児童

自身が主体となって学びを進めることができるよう、それらの基礎となる人との関わり合いの中で育まれる言語活動の充実に焦点を当てて研究を進めたいと考え、本主題を設定した。

尚、本校では地域創造学を「創造」とし、教育課程に位置付けることとする。

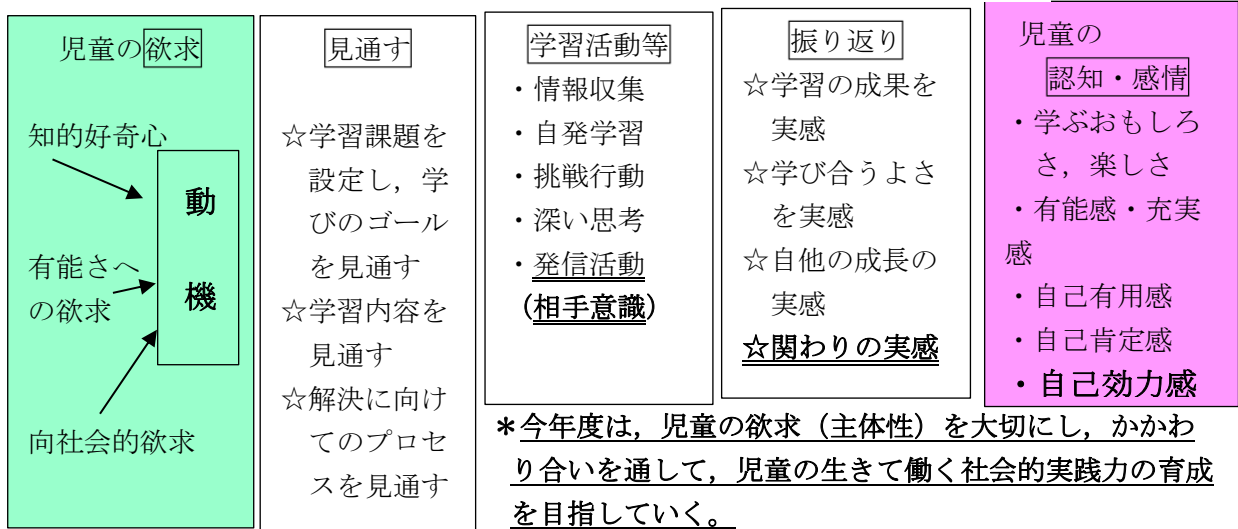
Ⅲ 研究に対する基本的な考え

1 主題について

住田町では、めざす子どもの姿を、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力「社会的実践力」を身に付けた姿として、研究開発を行っている。社会的実践力は、「A地域理解」「B社会参画に関する資質・能力」「C人間関係形成に関する資質・能力」「D自律的活動に関する資質・能力」の4つを統合した力であり、この力の育成を、小学校、中学校、高等学校が共通して段階的に目指し、12年間の育ちを見通した教育の在り方を考え、実践を進める。4つの力を統合した社会的実践力を身に付けた姿として、次のような態度に表れることを目指していく。

- ①体験活動を通じて、地域づくりを主体的に目指す態度
 - ②他と協働するために積極的コミュニケーションを図る態度
 - ③郷土を愛し、持続可能な社会を創造しようとする態度
- (住田研究開発グランドデザイン) より)

《生きて働く社会的実践力の育成のイメージ図》



本校では、昨年度までの実践を受け、児童が様々な関わり合いの中で主体的に学んだことや習得したことを自身が理解するにとどめるだけでなく、他者に分かりやすく伝えることや、伝え合うことで学びを深め、自分や集団の考えを発展させることを目指している。さらには、伝えられたことの喜びから、自己肯定感やその先にある自己効力感の体得を目指し、社会的実践力の育成につなげていきたい。

そのためには、発達段階に応じた言語活動を充実させていくことやその基となる児童一人一人が考えをもつための工夫が必要であると考えている。

2 副題について

地域創造学は、様々な他者との協働的な取組の中で学習が展開され、各教科等における見方・考え方も最大限に働かせながら学習課題を追究していく。様々な他者と、相互の考えを理解し合いながら学習を進めるためには、発達段階を踏まえた各ステージでの充実した言語活動が

必要であり、具体的には、他者と伝え合ったり協力したりする場面、多面的・多角的に考える場面や提案・発信する場面、学習の振り返りや自己の在り方を見つめる場面等があげられる。これらの場面では、児童に、事実を正確に理解して他者に分かりやすく伝えることや、伝え合うことで自分や集団の考えを発展させること等を意識して取り組ませたい。このことにより、多面的・多角的に考える力や協働する力、創出する力、他者受容の姿勢等が身に付いていくことが期待される。

教師が児童に意識させたい言語活動の在り方を、次の5点にまとめることができる。

- 情報を正確に取り出し、目的や意図に応じて事実等を整理できること。
- 事実等を自分の知識や経験等と結び付けて解釈し、自分の考えをもつこと。
- 意見と根拠、原因と結果等の関係を意識し、表現を工夫しながら、相手に伝えること。
- 様々な考えの異同（根拠や条件等）を整理して、自分や集団の考えを発展させること。
- 相手の思いや考えを理解・尊重し、状況に応じて的確に反応できること。

第1ステージでは、身近な「ひと・もの・こと」に焦点を当てた、社会を「知る・分かる・親しむ」体験活動を多く実施し、そこで気付いたこと・感じたことを表現し合う学習活動が想定される。

特に、保育園児や低学年児童は、家庭環境等による生活経験に差があることから、共通の学習基盤を作る必要があり、意図的に学習対象に出合わせ、交流させることが必要である。

第2ステージでは、前ステージの成果を生かしながら、より踏み込んだ言語活動に取り組ませたい。

例えば、体験等の前には、十分な情報収集を行い、視点に沿ってまとめたり、既習事項やこれまでの生活経験等を交流しながら予想等を立てたり、体験等の後には気付きや現時点での考えを交流したり、予想等の検証を行って新たな考えを構築したりして、学習課題のゴールに向かわせたい。

第3ステージでは、これまでの学習の成果を生かしながら、発表の仕方を意識した言語活動に取り組ませたい。特に、互いの立場や意図をはっきりさせて資料を活用したり、根拠を明確にしたりして、相手に伝わるように表現を工夫させたい。

このように、各ステージに応じて、児童が思考したことを言語化し、発表・意見交換といった交流を組み合わせながら相互に共有したり、深めたり、支援したりすることができる。言語活動を通して自分の発表に対して他者からコメントをもらうことは、相手に自分の伝えたいことが伝わっているのか、自分の考え方は妥当なのかなど、客観的な評価を得ることに]もなるため、学習の方向性を確かなものにしたたり、自分の考えを修正し深めたりしていく機会になる。

あわせて、支持的学習集団の風土のもと、学習対象に対して共感的な理解を示し、関心をもち続ける姿勢や自分がどのように関わっていけばよいか考え続ける姿勢も、言語活動の充実を支える重要な要素である。

各ステージで取り組ませたい言語活動は、次の表にまとめられる。

ステージ	各ステージで位置付けたい効果的な言語活動
第1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主語と述語を明確にして、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。 ○ 比較の視点（大きさ、色、形、位置等）を明確にして表現すること。 ○ 自分の経験と結び付けたり、判断と理由の関係を明確にしたりして表現すること。 ○ 話題に沿って話合うこと、互いの良いところを見つけて感想を伝え合うこと。
第2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 考えの共通点や相違点を整理し、話合うこと。 ○ 判断と根拠、原因と結果の関係を明確にして表現すること。 ○ 「例えば」「もし」等の条件文を使用して表現すること。 ○ 学んだ専門用語や概念を活用して、表現すること。
第3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 演繹法や帰納法等の論理を用いて表現すること。 ○ 規則性や決まり等を用いて表現すること。 ○ 互いの立場や意図を明確にして、意見交換すること。 ○ 学習した内容について、方法等を吟味して表現すること。
第4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 相手が納得できるように、相手を意識した説得力のある表現をすること。 ○ 相手の複数の質問にも、根拠を示しながら答えることができること。
第5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現代社会で必要とされる実用的文章の内容を理解し、自分の考えをもって表現すること。 ○ 現代社会でみられる問題等について、提言や根拠等を示しながら議論すること。

充実した言語活動が行われるためには、児童一人一人が自分の考えをもっていることが大前提となる。児童が相互の考え方をわかり、考えをもつことができるようにするため、思考ツールを活用するなどして、意図的に思考について鍛えていく必要がある。

各ステージで取り組ませたい思考ツールは、次の表にまとめられる。

ステージ	各ステージで挑戦したい思考ツール（例）	
第1	ベン図	ブレインライティング ウェビング法
第2	Yチャート	Xチャート ビフォー・アフター KJ法
第3	メリット・デメリット	ピラミッド・チャート SWOT分析
第4	生徒が選択して活用する	
第5	生徒が選択して活用する	

また、児童が関わり合いの中から学んで行くということに関しては、指導要領解説「地域創造学編」にあるように、他者との関わりに重点をおき協働を必須とするため、以下のことについても考えていく。（以下、指導要領解説「地域創造学編」より抜粋）

自分の考えを広げたり深めたりするためには、他者の意見が必要不可欠である。他者の見方・考え方に触れることは、自分の視野が広がったり、自分の考えの妥当性を再確認したり、修正したりすることにもつながり、他者の考え方や行動等を自分の生き方に生かすことができる。

例えば、学んだことの成果を児童が発表する場合、相手に自分の考えを伝えるために、内容や伝え方を吟味するなど、活動に対する目的意識が醸成され、相手を意識したコミュニケーション能力も磨かれることが期待される。児童には、根拠を明確にした妥当性のある提案をする必然性が生じるとともに、地域の人々からは感想や助言等のフィードバックが行われ、客観性の伴ったメタ認知能力も育まれていくことが期待される。

なお、ここでの他者とは、校内の児童や教職員に加え、異校種や役場、企業やNPO等、地域で生活するすべての人々を含んでいる。特に、職種や世代等の立場を超えて考えを交流することで、自分にはない見方・考え方を取り入れることができ、やがては児童の見方・考え方も

より豊かになっていく。協働的な学習を重ねることで、学習内容を一層深めるとともに、児童には新たな見方・考え方が加わり、課題解決や検討の視点や方法も明確になっていく。これらのことから、他者と協働することの良さを、次の4点にまとめることができる。

- ・新しい情報を得て、自分の情報を増やすことができる。
- ・情報が増えたことにより、課題解決に向けて、検討の視点や方法が明確になる。
- ・他者の考え方や行動面等の良さを学び、自分の生き方につなげることができる。
- ・コミュニケーション能力を高めることができる。

児童にとっては、教師をはじめ、人生の先輩である大人の励ましや助言は非常に重要であり、その後の学習に向かう姿勢に大きな影響を及ぼすものであることを踏まえ、今年度は、ゲストティーチャーのよりよい活用についても研究を深めたい。

IV 研究の仮説

地域創造学を中心とした教育活動全般において、「よりよい伝え合い」や「深い学び合い」をするために、かかわり合いの中での言語活動を意図的・計画的に取り入れることができれば、児童に、生きて働く社会的実践力を養うことができるであろう。

【住田町立世田米中学校】

I 研究主題

社会的実践力を身に付けた生徒の育成
～主体的・対話的な学び方を身に付ける授業づくりをとおして～

II 研究の目的

現在、本校には、3つの教育的課題がある。第1に、地域創造学を中核に据えた授業実践に取り組むことである。第2に、平成29年告示版学習指導要領を踏まえた授業実践に取り組むことである。第3に、生徒の学習内容の定着を図ることである。

「地域創造学」、「H29告示版」、「学習内容の定着」に共通するものは何か。それは、生徒自身が目的意識を持ち、対話（生徒と教員、生徒自身、生徒同士、生徒と地域住民）と活動を通して、試行錯誤を経ながら目的実現に向けて行動する姿勢である。

昨年度、本校では、上記の姿の育成を目指し、「社会的実践力の育成—主体的・協働的な学び方を身につける授業づくりを通して—」を研究主題に掲げ、校内研究に取り組んできた。先に挙げた3つの教育課題の解決に取り組みながら、今年度も「社会的実践力を身に付けた生徒」を目指すものとする。

III 研究仮説

教科や各領域の授業や家庭学習の指導等において、「主体的な学び方」や「対話的な学び方」を意図的・計画的に取り入れることができれば、社会的実践力を身につけた生徒を育てることができるだろう。

1 地域創造学の実践に関わって

地域創造学の実践を通して、「社会的実践力を身に付けた生徒」の育成を目指すために、以下3点を配慮したい。

- (1) 各学年で、「地域資源を取り扱い、その地域資源を活かした活動（以降、「プロジェクト」）」に重点を置いた授業実践に取り組む。
- (2) 「プロジェクト」では生徒の興味・関心に寄り添った活動を展開する。ただし、生徒の思考や活動の質・幅を広げられるように、教員は適宜手立てを講じる。
- (3) 生徒同士や生徒と教員による対話の他、生徒と地域住民による対話と活動が促進できるように、手立てを講じる。

2 H29告示版を踏まえた授業実践に関わって

H29告示版を踏まえた実践を通して、「社会的実践力を身に付けた生徒」の育成を目指すために、以下三点を配慮したい。

- (1) 「世中授業スタンダード」をベースにした授業開発・実践に取り組み、互見授業等を取り入れながら、指導上の不一致を解消すること。
- (2) 「キャリアパスポート」に取り組む活動を年間指導計画に組み込み、生徒のポートフォリオを蓄積し生徒自身が成長に気づけるように促すこと。
- (3) 生徒の実態や年間の学校行事等を踏まえた「特別な教科 道徳」の年間指導計画を作成し、その計画に基づいて授業実践に取り組むこと。

3 学習内容の定着に関わって

学習内容の定着を通して、「社会的実践力を身に付けた生徒」の育成を目指すために、以下三点を配慮したい。

- (1) 「生徒の夢」「自身の現状」「現状から夢実現までになすべきこと」等を生徒自身に把握させ、生徒自身が学習に取り組む目的意識を持てるように、手立てを講じること。
- (2) 校内研究の他に、計画的に授業の教科・領域の授業の互見授業を実施し、「主体的な学び方」や「協働的な学び方」を取り入れた授業の実現に取り組むこと。
- (3) 家庭学習に取り組む目的を確認し合ったり、目的に向かって適切な学習方法が選択できるように支援したりするなど、家庭学習に関する指導の改善を図ること。

IV 今年度の校内研究の計画

月日	研究・実践	内容
4月 2日 (金)	職員会議	協議：「研究主題、年間計画、組織等について」
4月16日 (金)	校内研	協議：「地域創造学のオリエンテーションと評価について」
5月27日 (木)	校内研	協議：指導案検討会① ※9月公開に向けて
6月11日 (金)	授業研究会	実践：地域創造学・単元「住田の魅力と課題を明らかにしよう！」(2年生)小岩先生
7月 8日 (木)	校内研	協議：「本公開に向けての確認」
7月15日 (木)	校内研	プロジェクト発表会
7月29日 (木)	校内研	協議：「ルーブリックの検証①」
8月 3日 (火)	校内研	協議：指導案検討会② ※9月公開に向けて
9月29日 (水)	学校公開	実践：地域創造学・単元「調査をしよう！」(1年生)熊谷先生 地域創造学・単元「住田の魅力を発信しよう！」(3年生)杉下先生
11月17日 (水)	授業研究会	実践：教科・単元「『さくらさくら』のイメージに合わせた前奏を、日本の音階を生かしてつくり演奏しよう」(3年生)新沼先生
12月9日 (木)	授業研究会	プロジェクト報告会 実践：地域創造学・単元「活動の振り返りをしよう！」(3年生)杉下先生
1月17日 (木)	校内研	協議：今年度のまとめと次年度計画

【住田町立有住中学校】

I 研究主題

生徒の社会的な実践力を伸ばす授業の在り方の研究
～各教科における「協働的な学び」の実践を通して～

II 設定理由

1 主題設定の理由

(1) 学校教育目標から

本校は、学校教育目標を「21世紀を担うたくましい心豊かな子どもの育成」と掲げ、自主的創造的実践者となることを目指している。これからの社会の維持・発展するために必要な力となる「たくましさ」や「心豊かさ」は、学校生活の中で継続的に身につけさせたい資質であることから、本主題を追求していくことは、本校教育目標の具現化につながるものである。

(2) 研究経緯から

本校では、平成27・28年度、小規模校の特性を生かして「生徒の考えを学級全体で交流、共有し、よりよい考えに高めていく」ためにどのような指導が有効であるかを研究した。平成29年度からは、住田町の小中高等学校が文部科学省研究開発学校に指定され、新設教科「地域創造学」で社会的実践力を育む研究に取り組むことになったことから、本校研究に町の研究のねらいをふまえ主題を設定した。

(3) 生徒の実態から

本校の生徒は、指示を素直に聞き、真面目に諸活動に取り組むことができる。全校トレーニングや合唱などは、「チーム有住」の意識で、全員が一丸となって取り組んでおり、学校・郷土への愛情が強い。反面、集団意識は強いが、自分から積極的に行動したり工夫したりする生徒は少なく、活動が保守的・依存的になる傾向がある。また、「型どおり」の発表となる場合が多く、考えを深めたり広げたりすることが苦手である。

そこで、協働的な学びを各教科で取り入れ、主体的で対話的な授業を展開することが課題改善の手立てとして有効であると考えた。

2 研究主題についての基本的な考え方

(1) 社会的実践力を伸ばす授業

社会的な実践力を伸ばすための授業とは、「地域資源である人、物、ことなどを有効に活用し、そこから学ぶ授業」、「様々な課題をとらえ、解決策や提案事項を検討し発信する授業」、「他者と協力して課題解決に取り組み、互いのよさを認め合う授業」、「主体的に最後まであきらめずに課題解決に取り組む授業」であると考えた。

また、地域創造学で示されているA～Dの資質・能力は、地域創造学の時間のみならず、各教科・領域の全ての授業で意識し育成していく必要がある。

(2) 協働的な学び

協働的な学びとは、「他者と助け合って課題を解決すること」、「他者の良さ・生き方から学ぶこと」だと捉えている。また、ここでの他者とは、学習の主体となる「生徒」、「教師」、「地域」を意味しており、全ての関係において互恵的に学び合う関係になることを意識している。

III 研究の仮説

授業で課題を明確にし、その解決のための学びを協働的に進めることで、「社会的な実践力」が身につくであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究内容

(1) 地域創造学における住田型探求的なプロセスの確実な実行

昨年までは、実践内容が、現状把握、課題設定、情報収集に留まりがちとなっていたため、今年度は、単元を弾力的かつ効果的に運用することにより、「実施・改善」と「まとめ・振り返り」の時間を確保し、住田型探求的なプロセスを確実に実行することを重点とする。

(2) 生徒の実態を重視した単元の展開

「単元で身につけたい資質・能力の確認」を行い、生徒の実態を考慮し、最も身につけさせたい資質・能力を焦点化して指導する。地域創造学においては、「生徒のニーズに基づいた学習」は、地域の人や物・事などと出会い、本当に探究したいテーマを見出し、課題解決に必要な方法を選択し追求させる中で生じる生徒の様々なニーズに外部機関との連携を深めることで応えていく。「柔軟な単元の取り扱い」をし、生徒の主体的な学習の展開を第一に考える。各教科においても単元の取扱いを考慮し実践していく。

(3) 地域創造学における学習評価の積み上げ

学習評価は、パフォーマンス評価とポートフォリオ評価とし、実践を積み重ね充実させていく。また、社会的実践力を育成していくうえでは、日常の授業において生徒の学習状況を見取りながら指導改善を図る「指導と評価の一体化」に努めることが不可欠である。

(4) 各教科での課題解決を目指した協働的な授業実践

各教科の授業において、生徒が主体的に課題を設定し、ペアやグループでの協働的な学びを効果的に取り入れた授業を実践検証していく。

2 研究方法

(1) 町の研究開発に基づいた研究

- ① 授業実践
- ② 各校交流
- ③ 社会的実践力についての評価

(2) 協働的な学びについての実践交流と指導方法の検証

(3) 各種調査の分析

V 研究経過

月日	研究・研修名	内容	授業者及び参加者等
4/2	職員会議	研究主題の確認、研究計画の確認	
4/26	校外研修	住田町教育研究所全体会	
5/19	諸調査①	Q-U実施①	
5/24	授業研究会	2年：地域創造学「住田町の魅力と課題を明らかにしよう」	授業者：伊東昭信・大和公恵・佐藤大樹
5/27	諸調査②	3年：全国学調、1年：新入生学調	
6/10	校内研修	I C T活用研修（ロイロノート）	講師：小田島新（大船渡高等学校）
6/11	相互交流①	世田米中学校研究授業（2年生）	参加者：佐々木佳恵
6/17	相互交流②	有住小学校研究授業（3年生）	参加者：中渡昭徳
6/29	相互交流③	世田米小学校研究授業（5年生）	参加者：山内薫
7/2	校外研修	盛岡市立上田中学校学校公開研究会	参加者：高橋学・伊東昭信
7/9	校内研修	特別支援教育校内研修会	講師：新沼登貴子（気仙光陵支援学校）

7/14	相互交流④	住田高校研究授業(1～3年)	参加者：高橋学 高橋秀治
7/15	相互交流⑤	世田米中学校「プロジェクト発表会」	参加者：佐藤大樹
8/17	校内研修	学校公開指導案検討会	
8/24	授業研究会	1年：地域創造学「調査をしよう！」	授業者：山内薫・中渡昭徳・志田竜彦
9/29	地域創造学 校公開授業研 究会	1年：「調査をしよう！」 3年：「発信したものの成果・課題を明らかに しよう！」	授業者：山内薫・中渡昭徳・志田竜彦 授業者：佐々木佳恵・黒坂太一・高橋秀 治
10/1	校外研修	岩手県学校図書館研究大会(前沢中)	参加者：高橋学・伊東昭信
10/7	諸調査③	2年：県学調	
10/15	校内研修	学習内容の定着	
10/27	諸調査④	Q-U実施②	
11/11	校内研修	学習内容の定着	
11/15	相互交流⑥	有住小学校研究授業(2年生)	参加者：志田竜彦
11/18	授業研究会	2年：英語「Reading2」	授業者：大和公恵・佐藤大樹
12/1	発表交流会①	2年：地域創造学(盛岡市立上田中学校)	※上田中学校とのへき地交流事業
12/6	相互交流⑦	有住小学校研究授業(1年生)	参加者：高橋秀治
12/9	相互交流⑧	世田米中学校「プロジェクト報告会」	参加者：中渡昭徳
12/15	発表交流会②	全校：地域創造学(中高連携・住田高校)	
12/22	発表交流会③	全校：地域創造学(保護者・地域)	
12/23	校内研修	ループリック検討会	
1/18	校外研修	第17回文部科学省研究開発学校フォーラム	参加者：伊東昭信
2/2	発表交流会④	1年：地域創造学(小中連携・有住小)	
2/10	校外研修	第65回岩手県教育研究発表会	発表者：伊東昭信
2/18	校外研修	住田町教育研究所全体会	
2/25	発表交流会⑤	1年：地域創造学(中中連携・世田米中)	
3/3	校内研修	次年度計画	

【岩手県立住田高等学校】

I 研究主題

その時代に合った価値を生み出せる力とともに社会的実践力(12項目)を有機的に育成する。
～「社会的構造を知る力」・「課題解決力」・「自信と自己効力感」の育成～

II 主題設定の理由

住田高校生は皆、素直で真面目である。しかし、自主性に欠けるところが見られる生徒が多い。昨今の変化の激しい社会においては、主体的に物事を考えて行動する力を身につけ、自ら社会を創造しようとする態度を育てることが重要であり、必要とされる。

また、コミュニケーション活動を大切にしながら、地域の方々と繋がりを持ち、地域社会との協働を通じて自己の生き方を考えさせ、生徒個々により良い進路選択ができるようにする。1年生は、地域を知る以前にまず「自己を知ること」から学習活動を進めていく。

III 研究仮説

第4ステージは、まず「自己を知ること」から学習を進め、その後に地域を知るとともに地域の方々から直接情報提供や指導をいただき、生徒個々が考察したうえで、調査研究を行

う。発表会をとおして情報発信の仕方を学ぶ。

第5ステージは、生徒たちの興味関心をもとに、地域の現状を理解したうえで、住田に関わる人々（誰か）をハッピーにするためのプロジェクトを考え、アクションを起こす。得られたデータをもとにその結果を考察する。

両ステージともに、1年間のスケジュールの中でフィールド調査を実施する。その過程において、地域の多様な方々と関わる機会を持つことや数回にわたる実践発表会を通じて、生徒個々に自主性を育ませる。さらには、主体的に物事を考える力を身につけさせる。

教員及び教育コーディネーターは、伴走者という立場で、生徒に関わり支援していく。

IV 評価について

生徒は、毎時間の振り返りで自己評価シートに記入し、担任が点検した。自己評価シート記入により、活動記録と次回の取り組み内容を確認し、ワークシートはチューター及び教育CNに目を通してもらった。

発表会実施においては、発表者の視点と聴衆者の視点の目標を設定し、発表会での気づきや学んだことの振り返りをさせた。第4ステージにおいては、発表会における発表者の様子について、ルーブリックに基づく各チューターによる観察評価の実施を試みた。

V 【教員研修】

- 1 年度初めの職員会議 4月 6日（火）

令和3年度の研究開発学校についての取り組みを確認した。

- 2 令和3年度 研究開発学校「地域創造学」に係る教員・CNの顔合わせ及び
取り組み概要確認打ち合わせ 4月 8日（木）

- 3 校内研修会① 校内研究会の相互交流 7月14日（水）

第4ステージの「ちょこっとチャレンジ成果発表会」および第5ステージの授業を学校公開にし、町内の小・中学校並びに教育委員会関係者にも視聴していただいた。授業公開後、校内研修会を開催し、生徒の取り組み内容について教員間での共有を図った。また、運営指導委員の岩手大学田代高章教授から、指導助言をいただいた。

☆問題解決 よくする提言・提案 論理的思考力を働かせる

☆伝え合う力 深めるためのやりとりが大事

☆自己効力感 → 自分の良さ 肯定から肯定へ

今できることは何か。 +（プラス）発想をすすめる。

- 4 校内研修会② 研究開発学校5年次公開授業研究会 9月29日（水）

第4ステージ・第5ステージそれぞれの研究発表会を通じて、生徒の取り組み内容を確認した。町内及び県内の教育委員会関係者にも来校視聴そして意見をいただいた。

- 5 地域創造学主担当者と教育CNでのミーティング 11月15日（月）

今年度の活動の振り返りと次年度に向けての検討事項を確認した。

- 6 校内研修会③ 最終プロジェクト発表会（第5ステージ） 11月24日（水）

- 7 中高連携事業ステージ交流会（世田米中学校） 12月 9日（木）

中高連携事業ステージ交流会（有住中学校） 12月15日（水）

- 8 令和3年度「地域創造学」年間振り返り 定例職員会議 1月17日（月）

- 9 校内研修会④ 地域創造学校内ステージ交流会 1月19日（水）

- 10 他校研究会相互交流への参加及び視察

町内小・中学校校内研修会（世田米中学校・有住中学校・世田米小学校・有住小学校）

5 評価に関する取組について

(1) 地域創造学の学習評価について

① 評価の基本的な考え方

地域創造学においては、児童生徒の学習状況の評価は観点別学習状況の評価を基本とするが、数値的に評価することはそぐわず、児童生徒一人ひとりにどのような資質・能力が顕著に身に付いたかを具体的に文章で記述する個人内評価で把握する。そして児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中で児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくという、指導と評価の一体化となるサイクルを大切にす。

② 評価の方法及び工夫

ア パフォーマンス評価

児童生徒の学習単元と社会的実践力の系統表を基に、児童生徒の学習単元における目標設定を行い、具体的な児童生徒の学習過程を想定しながら、評価の観点や評価規準の設定を行う。これを土台として、児童生徒にとってのパフォーマンス課題やルーブリックを分析・検討し、設定する。パフォーマンス課題とは、地域資源を学習材として、様々な視点から検討して設定した学習課題であり、学習を通して得た知識やスキルを使いこなしながら納得解や最適解を見出し、解決する課題である。具体的には、成果物や完成作品などのプロダクトや、プレゼンテーションやスピーチ、協働での問題解決、実演といったパフォーマンスを評価する課題を指すものである。地域創造学におけるパフォーマンス評価に関しては、単元において学習した様々な知識や技能等を使いこなすことが求められる場面において設定している。

イ ポートフォリオ評価

児童生徒の学習の過程や成果等の記録を計画的にファイルに集積する手立てが有効であり、児童生徒の学びの省察方法としてポートフォリオ（住田町：学びのあしあと）を積極的に活用する。ポートフォリオは、自分が得た情報や学習内容を自ら整理しながら集積し、学びの足跡が明確に捉えられることから、児童生徒自身が自分の学習を自覚的に展開させていくことを大切にしている。

③ 評価に関わる実践例

ア パフォーマンス評価

地域創造学を本格実施してからのこれまでの2年半においては、評価検証部会の取組を基に、各学校で地域創造学における評価方法の一つである、パフォーマンス評価の実践を積み上げた。その中から、中学校の単元におけるパフォーマンス評価の事例及び評価改善に係る学校の昨年度の取組を紹介する。

単元名 中学校第1学年「住田に地域貢献している人や資源について調べよう！」

本単元は令和2年度の中学校第1学年第1単元にあたり、話合いや調査活動を通して、身近なところにも地域のために貢献している人や地域を活性化していける地域資源があること、住田町で活躍している人の願いや町を活性化させるための工夫や現状について知ること、地域についての理解を深め、自分自身が1年間探究を進める人・資源を設定し、最終的にはCM作成を行って地域の魅力を発信するための見通しを持つことをねらいとする単元である。まず、この単元の内容及び社会的実践力の系統表を基に、具体的な生徒の学習過程を想定しながら評価の観点や評価規準の設定を行い、それを土台として、下記のようなパフォーマンス課題及びルーブリックを設定した。

○単元名 「住田に地域貢献している人や資源について調べよう！」（検討会前）

みとる資質・能力	A ◎地域理解 D2 ☆創出する力	
取り組むパフォーマンス	住田町に貢献している人・資源を発信するための計画を立案する。	
パフォーマンスの特徴	A	・メンバー全体が情報発信に向けた行動を起こしたり、第三者から建設的な指導を受けることができる、より実現性の高い企画書を作成する。（例：現物・現地を確認した上で取り上げる魅力が映えるような企画を記述している、入手可能な写真・動画を予め検討し、シナリオを設定している。
	B	・「住田町に貢献している人・資源」を発信するメディアを作成するための企画書を作成する。
	支援の手立て	・計画書作成に関する動画を視聴し、その内容を分析する活動を設定する。 ・3人一組のグループを作り、アイデアを出し合える環境を設定する。

単元終了後、生徒のアンカー作品や設定したパフォーマンス課題及びルーブリックに基づいて複数の教師で評価を行った上で、評価の視点のすり合わせを行い、さらに次年度に向けてのルーブリックの見直しを行うため、次のような実践（検討会）を行った。

○中学校の実践

「パフォーマンス課題：住田町に貢献している人・資源を発信するための計画を立案する。」について

【1】教師個人による作品の評価

ルーブリックに基づき教師が個人で生徒の作品を評価する。

- ・ルーブリックを確認する。
- ・ルーブリックに基づいて、生徒の作品をA、B、（あればC）と評価する。
その際に、評価した理由を記述する。

【2】複数の教師による評価の視点すり合わせ

教師が個人で評価したものを他の教員と共有し、相違点を確認する。

差異がある場合は、評価をどちらにすれば良いのか話し合い合意形成を図る。

- ・周囲の先生と「評価した結果」や「その理由」について共有を図る。
- ・周囲の先生と「評価した結果」が同じであれば、その子どもの評価は確定。
- ・周囲の先生と「評価した結果」が異なれば、周囲の先生と話し合い、評価を確定させる。その際に、評価を確定させた理由付けを明確にする。

【3】評価のためのルーブリック修正

【2】の内容を踏まえ、次年度に向けたルーブリックの修正を図る。

- ・周囲の先生と「評価した結果」が異なっていたということは、「当初、設定したルーブリックの評価基準に改善の余地があること」を意味している。「評価を確定させた理由付け」を踏まえて、次年度に向けたルーブリックの修正を図る。
- ・ルーブリックの修正を図った後、A、Bそれぞれの評価となった作品をアンカー作品（モデル）として記録に残す。

検討会后、次年度に向けて以下のようなルーブリックの修正を図った。このような実践を通して、児童生徒の実態等に基づいて、随時パフォーマンス課題やルーブリック等の修正を図っていくことが大切であることが明らかになった。本町の地域創造学におけるパフォーマンス評価の在り方に関しては、令和元年度から評価検証部会や教育研究所全体会等で、県内の大学教員を招聘し、パフォーマンス評価に係る理論の部分から勉強会を数回開催して、実践を積み上

げてきたものである。まだ手探りで進めている段階であるが、今後も実践を積み重ね、よりよい評価の在り方を追究していく。

○単元名 「住田に地域貢献している人や資源について調べよう！」（検討会后）

みとる資質・能力	A ◎地域理解 D2 ☆創出する力	
取り組むパフォーマンス	住田町に貢献している人・資源を発信するための計画を立案する。	
パフォーマンスの特徴	A	・住田町全体を連想できたり、四季を通じて楽しめたり、背景に住田町の良さ・雰囲気を感じられたりするような企画書を作成する。（例：気仙川の魅力や、気仙川での釣り・砂金とりなどを紹介した企画書を書いている。四季を通じて楽しめる種山が原の魅力を紹介する企画書を書いている）
	B	・「住田町に貢献している人・資源」を発信するメディアを作成するための企画書を作成する。
	支援の手立て	・計画書作成に関する動画を視聴し、その内容を分析する活動を設定する。 ・3人一組のグループを作り、アイデアを出し合える環境を設定する。

イ ポートフォリオ評価

令和元年度からの地域創造学の本格実践を機に、町内の小・中・高が共通してポートフォリオ（学びのあしあと）を活用している。ワーキング・ポートフォリオ（青色ファイル）とパーマネント・ポートフォリオ（黄色ファイル）の二つのポートフォリオを使い分け、ワーキング・ポートフォリオには一年間の学びを蓄積し、パーマネント・ポートフォリオはその中から精査して残していく資料を12年間つないでいくために活用している。ワーキング・ポートフォリオに関しては、探究のプロセスの中で児童生徒自身が、自分が得た情報や学習内容を整理しながら集積し、単元末や年度末等の場面で、自分の学習を自覚的に振り返るツールとして活用することが各ステージ段階で定着してきている。また、パーマネント・ポートフォリオに関しても、例えば中学校1年生の生徒が、小学校6年生の時に蓄積した資料を活用して探究テーマを設定する等、ステージ間の学びをつないでいくツールとしての有効性を示す事例も多く見られるようになってきている。

ワーキング
ポートフォリオ
(1年分)



パーマネント
ポートフォリオ
(小学校～高校)



令和2年度からは、町で配備した一人一台タブレットも活用して、資料の蓄積や探究活動等を行っている。資料の蓄積に関しては、ポートフォリオとタブレットをどのように併用していくことが有効なのかについても、検討を行っていかなければならない。

④ その他の取組

ア 教育達成測定

児童生徒が感じている学習の達成感や満足感、自己効力感等を測定する一方法として、住田町教育達成測定を開発した。この教育達成測定とは、社会的実践力の育成を図る一つの手段として、12の資質・能力それぞれについて測定項目を設定し、質問紙形式で測定するものである。これらの測定項目は、児童生徒の具体的な学習後の学びの姿を記述していることから、児童生徒自身が自分の学習の成果や情・態度を実感的に振り返り易いだけでなく、教職員全体で児童生徒の目指す姿を具体的に共有することも可能となり、教師の見取りの視点ともなり得るものである。

本測定は、町内の小中高5校で令和元年度から2年間計8回実施。住田町と同規模の自治体の協力校（小～高）の児童生徒の調査結果と比較しながらより客観的に分析を行う。地域創造学の授業実践開始を機に、地域創造学において設定したねらいの達成について、具体的な児童生徒の学びの姿や、学びの積み重ね（計画的な学習の軌跡の追跡）を通して検討を進めた。「評価検証部会」において、地域創造学にふさわしい評価の在り方について検討を行い、児童生徒の学習の変容や、学習への達成感をとらえる一手法として、教育達成測定の項目を検討し、以下の通り開発した【表5-1】。

【表 5 - 1 教育達成測定（詳細は別冊資料参照）】

質問内容		当てはまらなく まったく	当てはまらない	どちらとも 言えない	当てはまる	よく当てはまる
ア	地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。	1	2	3	4	5
イ	自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。	1	2	3	4	5
ウ	地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える。	1	2	3	4	5

令和元年度から町内の小・中・高5校及び、対照群として県内の同規模の自治体の小・中・高5校でそれぞれ2年間、計8回実施した。本測定に関しては、岩手大学山本奨教授に、分析をしていただいた。

まず12の測定項目について因子分析を行い、大きく「地域に対する価値の発見や課題を解決するために必要な能力」に関するものと、「仲間との協働に係る態度」に関するものの二つの因子を抽出し、それらをそれぞれ『地域』、『仲間』と命名し、この2観点で地域創造学の学習成果を評価していただいた。山本教授に作成していただいた分析結果の要旨は以下の通りである。

要 旨

地域創造学の学習成果について、これを実施していない対照群と比較することで、明らかにすることを試みた。まず、学習成果を『地域』『仲間』の2観点でこれを測定する尺度を作成した。これを用いて、地域創造学取組3年目（令和元年度）と4年目（令和2年度）に、各4回測定したところ、次のことが明らかとなった。

小学生では、『地域』は2年間継続して対照群よりも高い成果が認められた。『仲間』については、同様に高い成果が認められていたが4年目の2月のみ差が認められなかった。

中学生では、小学生同様『地域』については2年間継続して対照群よりも高い成果が認められた。『仲間』は3年目において対照群との差がなかったが、4年目は対照群よりも高い成果が認められた。

高校生では、『地域』は3年目の5月には対照群との差がなかったが、7月には対照群よりも高い成果が認められた。4年目には差がない状態となった。『仲間』は3年目において差がなく、4年目は対照群の方が高かった。（詳細は別冊資料参照）

「地域に対する価値の発見や課題を解決するために必要な能力」に関しては、小・中・高の校種において、2年間を通して、概ね対照群よりも高い成果が認められた。地域をフィールドに探究活動を展開する地域創造学の特徴があらわれた成果であると捉えられる。

逆に「仲間との協働に係る態度」に関しては、対照群と比較しても、差がない状態であることがわかった。差がないからといって全く効果がないというわけではないかもしれないが、この観点に関して、今後どのように育成に関わる工夫を行っていくのかについては、検討が必要である。

また、今後12の資質・能力それぞれがどのように変容したのかについても、小・中・高の教員が集まり、これまでの取組や児童生徒の変容等を振り返りながら分析していく機会を設定し、12年間の学びであるという視点でカリキュラム全体を見直していかなければならない。

イ 第5年次学校公開研究会について

これまでの研究成果を基に、研究発表、授業公開、授業研究会、講演会を行った。授業研究会においては、小・中・高の12年間のつながりのある学びを、さらに効果的なものとしていくための指導の在り方や、ゲストティーチャーの有効活用、探究のプロセスの生かし方、地域をどのように巻き込んでいくかなど、様々な視点から、たくさんの貴重なご意見をいただいた。

【第5年次学校公開研究会の様子】



第5年次学校公開研究会 参観者所感より

・豊かな自然と歴史ある住田に生まれた子ども達が地域を学ぶことに、大いなる意味を感じます。系統だてた実践を学ばせていただきました。児童が過ごす生活圏であっても不思議がいっぱいあり、探究した思いがどんどん膨らんでいくのだと思います。その学ぶ意欲を大切に、学びをコーディネートする教師の役割を学びました。その学びを町をあげて支える地域創造学、素晴らしい取組でした。（小学校参観者）

・生徒たちが主体的に、そして協働的に自分たちのテーマに取り組む姿を、1年生及び3年生の授業で拝見することができました。また、1年生の地域のよさを改めて深く考える学びが、3年生への、それを外に向けて発信したいという学びにしっかりとつながっており、小学校、そして中学校3年間を通して系統的な学びになっていると感じました。（中学校参観者）

・生徒たちが成長していく姿が、はっきりと感じられました。町外から入学した生徒も「住田」に限らず、自分の暮らす地域に目を向けて取り組んでいる視点も良かったと思います。住田が考えた「地域創造学」が住田町外にも広がっていることが素晴らしいと感じます。（高等学校参観者）

ウ 研究開発学校推進委員会と運営指導委員会の開催について

毎月、小・中・高等学校5校の校長が参加する研究開発学校推進委員会を開催し、研究開発についての検討、協議を行ってきた。

さらに、7名の外部有識者による運営指導委員会を組織し、研究について専門的見地から直接ご指導をいただいた。

【運営指導委員会】

組織

氏名	所属	職名	備考（専門分野等）
田代 高章	岩手大学教育学部	教授	教育方法学
山本 奨	岩手大学教育学部	教授	学校臨床心理学
後藤 顕一	東洋大学食環境科学部	教授	教育課程
毛内 嘉威	秋田公立美術大学	副学長	道德教育、教育課程
向口 千絵子	岩手県教育委員会学校教育室	指導主事	
砂沢 剛	岩手県教育委員会学校教育室	指導主事	
木下 克美	岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所	主任指導主事	

開催記録

	開催期日 場所	内容
第1回	令和3年7月30日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部 教授 田代 高章 岩手大学教育学部 教授 山本 奨 東洋大学食環境科学部 教授 後藤 顕一 秋田公立美術大学 副学長 毛内 嘉威 岩手県教育委員会学校教育室 指導主事 向口 千絵子 岩手県教育委員会学校教育室 指導主事 砂沢 剛 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 主任指導主事 木下 克美 ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・令和3年度7月までの研究状況について
第2回	令和3年9月29日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部 教授 田代 高章 岩手大学教育学部 教授 山本 奨 東洋大学食環境科学部 教授 後藤 顕一 秋田公立美術大学 副学長 毛内 嘉威 岩手県教育委員会学校教育室 指導主事 向口 千絵子 岩手県教育委員会学校教育室 指導主事 砂沢 剛 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 主任指導主事 木下 克美

		<ul style="list-style-type: none"> ・第5年次学校公開研究会での指導助言 ・研究の方向性についての指導助言
第3回	令和4年2月18日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部 教授 山本 奨 東洋大学食環境科学部 教授 後藤 顕一 秋田公立美術大学 副学長 毛内 嘉威 岩手県教育委員会学校教育室 指導主事 向口 千絵子 岩手県教育委員会学校教育室 指導主事 砂沢 剛 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 主任指導主事 木下 克美 <ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめに対する評価と次年度計画についての指導助言

エ 教育研究所全体会、教育研究所教職員研修会の開催について

町の教育研究所では、町内小・中学校教諭、県立高等学校教諭、町内保育士を研究員として委嘱し、年2回の全体会、教職員研修会の開催を通じて各校の取組の共有を図っている。

【今年度の研究所全体会の開催】

	開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
第1回	4/26	65人	住田町役場町民ホールと町内小・中・高等学校をオンラインでつないで実施	・今年度計画確認、部会開催
第2回	2/18	63人	住田町役場町民ホールと町内小・中・高等学校をオンラインでつないで実施	<ul style="list-style-type: none"> ・部会発表（今年度の成果と課題） ・校内研究のまとめ発表

【今年度の教職員研修会の開催】

開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
7/30	60人	町内各施設等	・森林環境学習、滝観洞、農業、まちづくりの4コースに分かれて地域資源について教職員が学ぶ研修会

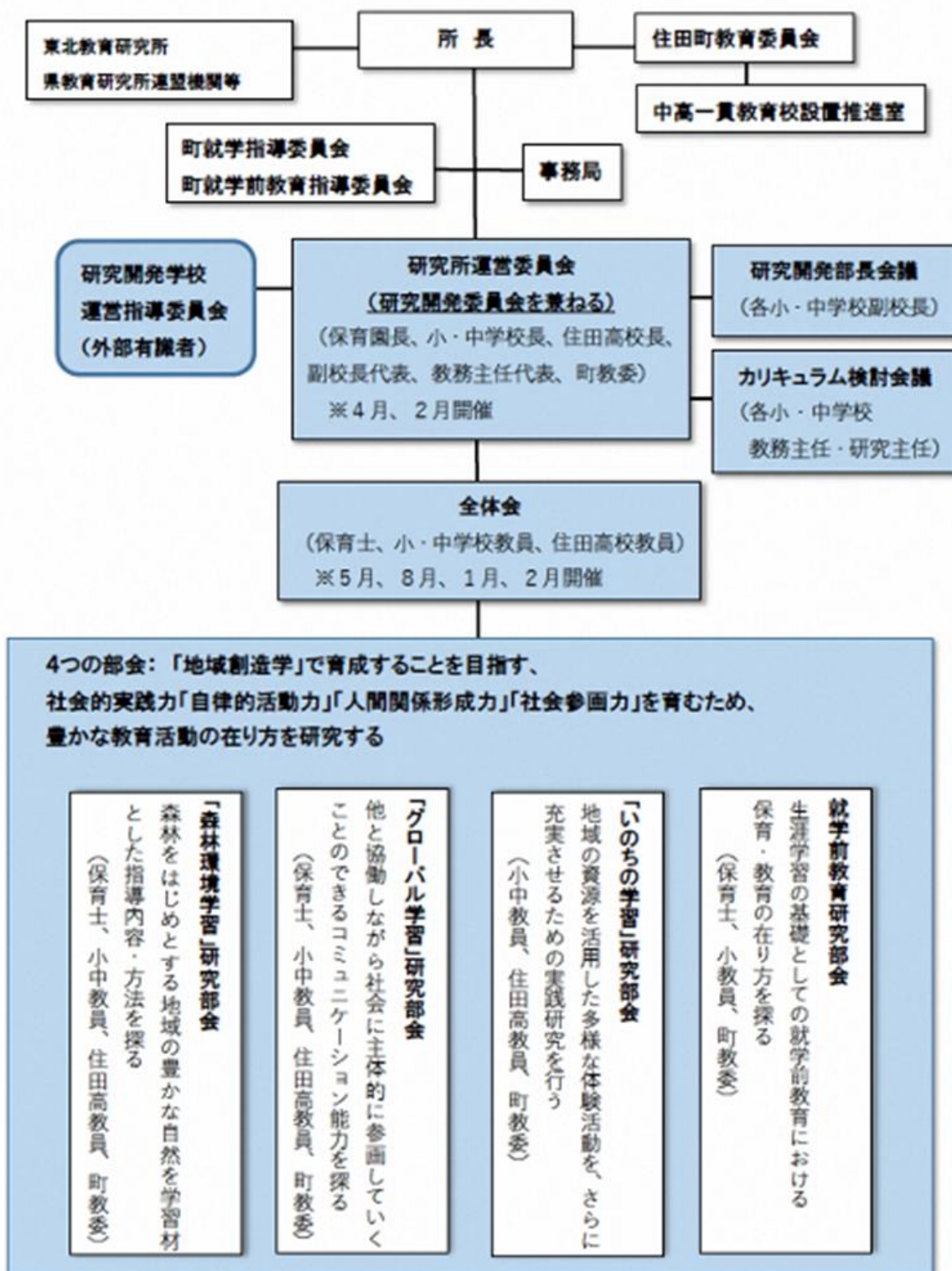
【教職員研修会における農業体験コースの様子】



(3) 教育研究所の組織について

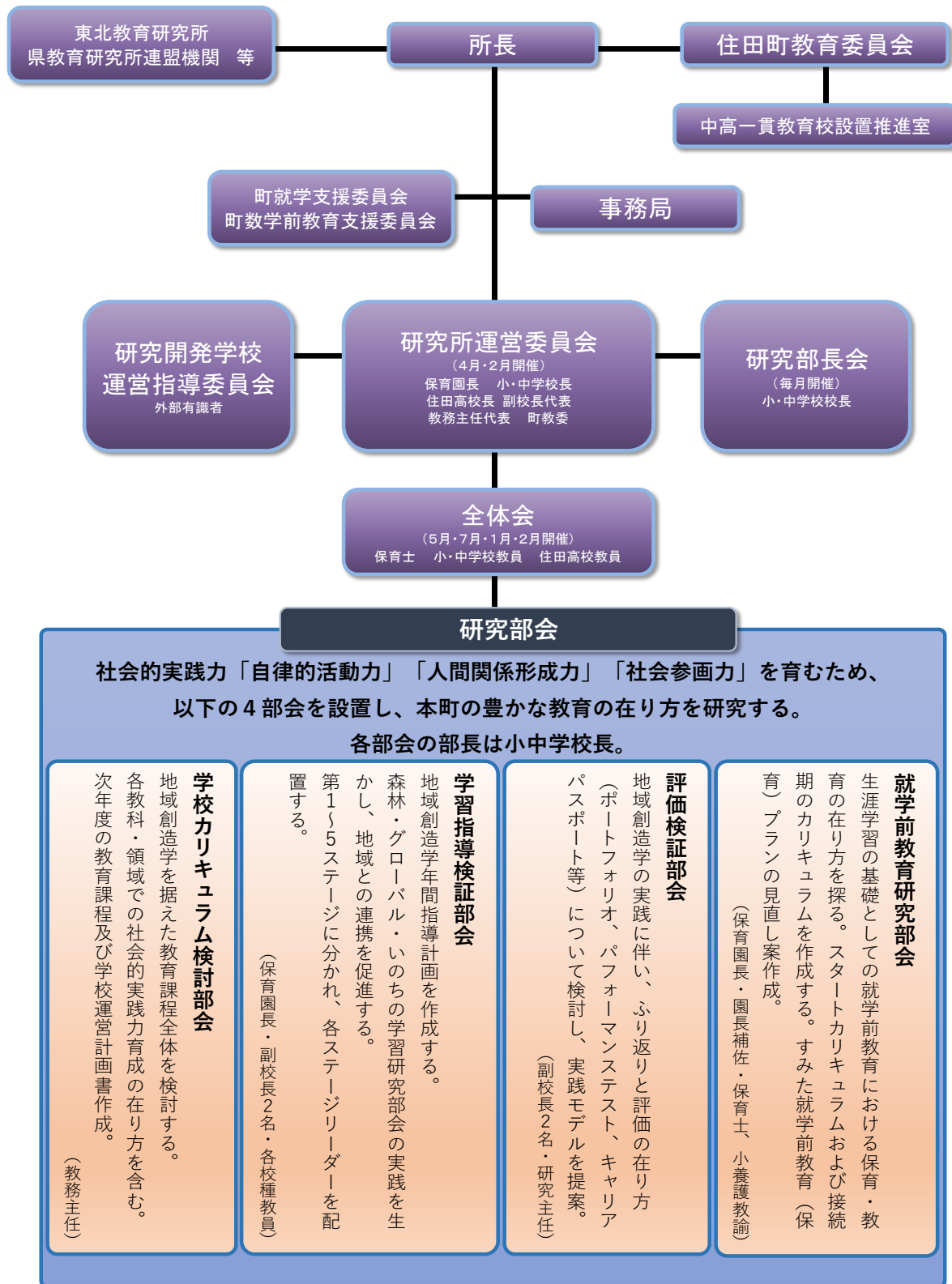
研究1年次、各部会での取組をとおして異校種の教員が交流し互いの実践について相互理解を図ることと、各学校の校内研究において、目指す資質・能力の検討と実際の教育課程実施に向けての準備を行うことを通じ、町の教育研究所体制について改編の必要性が議論されるようになった【表5-1】。

【表5-1】平成29年度研究所組織図



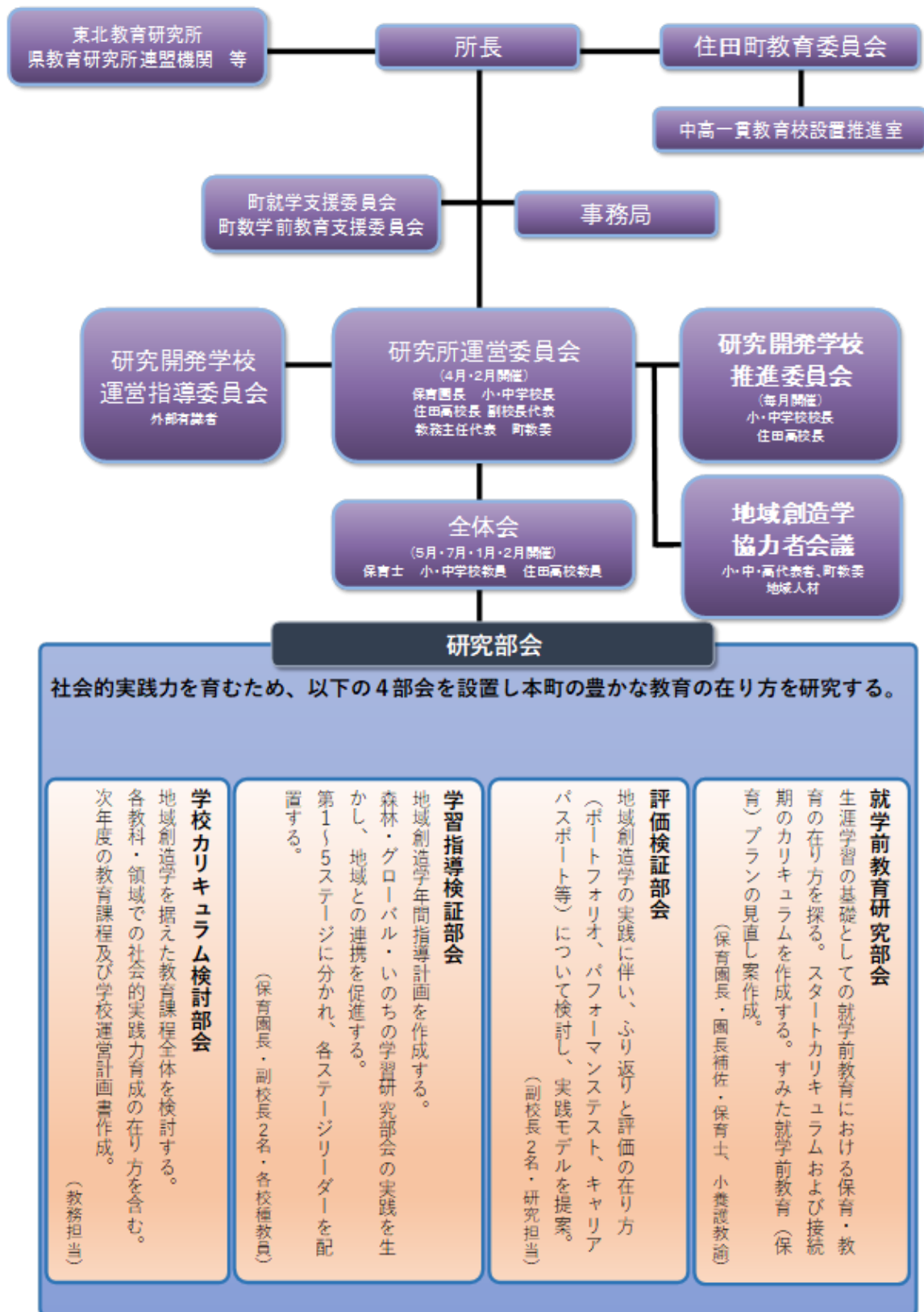
30年度から地域創造学を据えた教育課程を実施しながら、その成果や課題を継続的に検証していくために、研究所の組織を大幅に改編し取り組んでいくこととした【表5-2】。

【表5-2】平成30年度研究所組織図



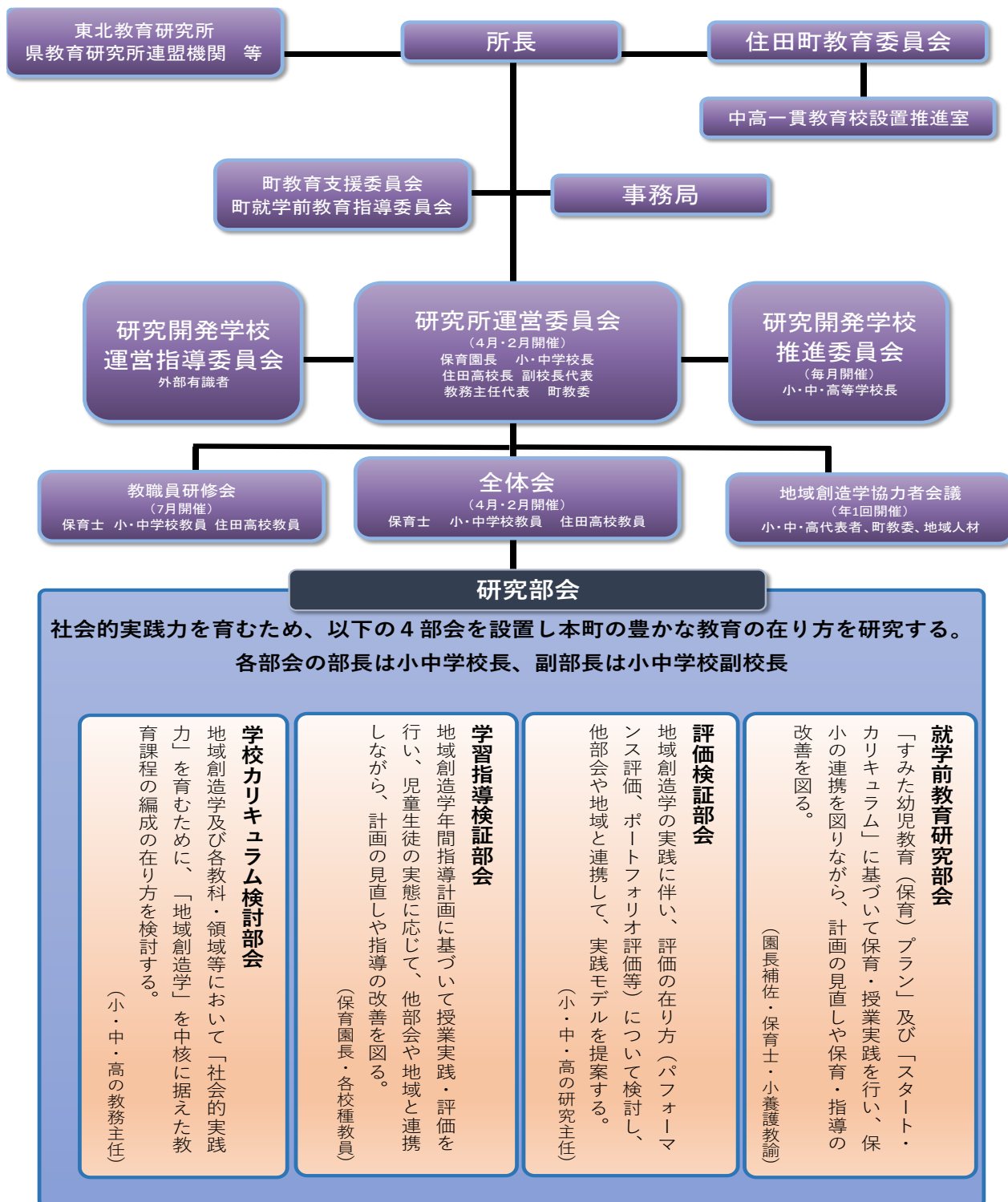
3年次は各校の代表者、町教育委員会と、地域創造学の学びに協力をいただく地域の方々
とで、地域創造学の構想や学習予定、協力を要請したいこと、地域の方からの助言や意見等
を直接お聞きし協議する場として、新規に地域創造学協力者会議を開催した【表5-3】。

【表5-3】令和元年度研究所組織図



第4年次からは、1月と2月に行っていた全体会の内容を集約して2月に1回行い、夏休みに行っていた全体会は、地域資源を教員が学ぶための「教職員研修会」に名称を変更することとした。【表5-4】。

【表5-4】令和2～3年度研究所組織図



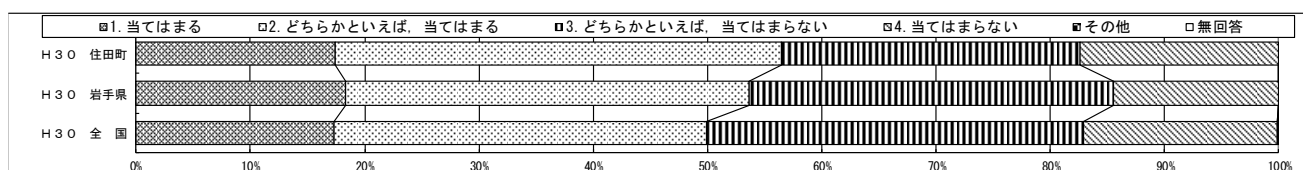
6. 研究開発の成果

(1) 児童生徒への効果

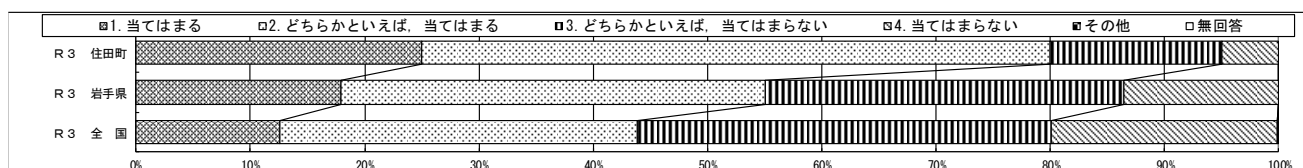
社会的実践力の系統表や単元計画、学習指導要領解説に基づいた地域創造学の本格的な授業実践から約3年が経過し、授業に取り組んできた児童生徒にも、たくさんの成果がみられるようになってきた。地域のよさについて体感的に理解を深め、工夫しながら他者に誇らしげに伝え合う児童や、地域の魅力をどのように発信すればいいのか模索しながら、仲間と協働して自分なりの方法を導き出していく生徒、そして地域課題を自分事としてとらえ、よりよい地域社会の在り方を創造し、これまでに培った知識や地域の方のアドバイスをフル活用して解決を図ろうとする生徒など、このような児童生徒の姿は、社会的実践力に関わる様々な成長の表れであると捉えられる。令和3年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査の「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の質問に肯定回答する生徒（中学校3年生）の割合は肯定回答は80%であり、同一集団である平成30年度（小学6年生）の肯定回答56.5%から、23.5ポイントの伸びが見られた【図1-1】。今後も、身近な地域社会というフィールドで、探究のプロセスを幾度も往還し、日々自身の活動を振り返りながら一歩ずつ成長していく児童生徒の変容を、教師が見とり、価値づけ、適切に支援していくことが求められる。

【図1-1】同一集団での経年変化 H30年度小学校6年生、R3年度中学3年生

質問番号	質問事項											
	地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか											
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	無回答
H30 住田町	17.4	39.1	26.1	17.4							0.0	0.0
H30 岩手県	18.3	35.3	31.8	14.5							0.0	0.0
H30 全国	17.3	32.6	33.0	17.0							0.0	0.1



質問番号	質問事項											
	地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか											
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	無回答
R3 住田町	25.0	55.0	15.0	5.0							0.0	0.0
R3 岩手県	17.9	37.1	31.3	13.6							0.0	0.0
R3 全国	12.6	31.2	36.2	19.8							0.0	0.1



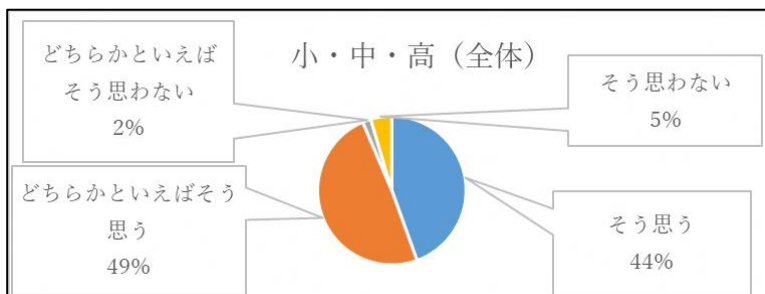
(2) 教師への効果について

年10回以上行われる授業研究会の相互交流や各部会での協議等を通して、社会的実践力の系統表に基づいてどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきのかなど、地域創造学を、校種を越えた12年間の教科であるという視点で指導や評価の在り方について考えられるようになってきた。研究会の協議においても、「これまでは自分の校種における指導のことはしか考えてこなかったが、地域創造学においてはこれまでの校種でどのようなことをやってきたのかという視点で系統性を考えて授業づくりをしていく視点が大切だと感じた」という声が異校種の教員から聞かれた。地域創造学に係る教職員アンケートにおいても、「教師は先導ではなく、伴走であることを学んでいる。どの教科、指導でも同じことが言える

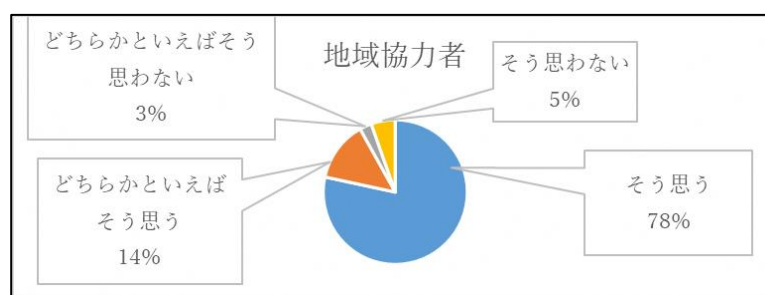
と思うので、伴走であっても、子どもたちの想いを盛り上げていける指導力を身に付けていきたい。」等の記述回答が複数見られ、地域創造学の指導実践が、日常の授業改善に繋がっていることが窺える。このような研究開発に付随して表れてきた変容も、今後の取組を検証していく上での視点の一つとして、大切に捉えていかなければならない。

(3) 保護者等への効果

令和2年度末に地域創造学についての、小・中・高の保護者、ゲストティーチャーやアドバイザー等でこれまでにご協力いただいた地域協力者向けのアンケートを実施した。内容は、「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思えるか?」という項目に関して四段階評価で回答するもの他に、「有意義である(ない)と思う理由」や、「地域創造学に期待したいこと」を自由記述で回答するものを設定した。「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義



(保護者向けアンケート結果)



(地域協力者向けアンケート結果)

だと思えるか?」という項目に関しては、保護者、地域協力者共に肯定的な回答の割合が高かった。その理由としては、「主体的に行動したり、物事を考えたり、学びの方法、幅を広げるきっかけとなるから」、「地域のことを学ぶことで郷土愛の形成に繋がると思うから」、「本人が楽しそうに学んでいるため」、「地域の方と交流することでコミュニケーション能力が身につくから」などの回答が得られた。

また、「地域創造学に期待したいこと」の項目における記述内容としては、「住田の将来を担う人材の育成を期待する」、「郷土に誇りを持って地域発展に貢献できる子どもたちを育ててほしい」、「困難なことに遭遇した時に、諦めずに皆と力を合わせて乗り越えていけるような力を身につけてほしい」、「大人にとってもいい学びを生むと思うので、地域全体で子どもたちの活動をもっと応援していく取組になっていくことを期待する」等の回答が得られた。

その一方で、少数ではあるが、「有意義だとは思わない」という回答もあった。その理由としては、「まだやらされている感があって、本気度が感じられない」、「5教科の学習にもっと力を入れるべき」、などの回答であった。全体的には肯定的な回答が多かったが、「地域創造学はどのような学びなのか」ということへの理解が深まった上での肯定的な回答なのか、多面的・多角的に分析しながら、地域全体の共通理解を図るための手立て等をさらに工夫していく必要がある。回答数にとらわれず、否定的な意見についても、今後の学びをより充実したものにしていくための材料としていかなければならない。

(4) 地域との協働について

地域をフィールドにした学びである地域創造学においては、地域との協働は欠かすことのできないツールであるといえる。これまでに延べ約300名の方々にゲストティーチャーやアドバイザーとして地域創造学の授業にご協力いただいたことや、地域創造学協力者会議において、地域を担う子どもたちへの切実な思いや願いを聴くことができたことは、地域と共に子どもた

ちの資質・能力を育成していく形を構築していくことに繋がる、一つの成果であると捉えている。地域創造学に係る地域協力者アンケートにおいては、「大人になってもいい学びを生むと思うので、地域全体で子どもたちの活動を応援する取組に、もっとなっていくことを期待している。」という記述回答も見られた。今後もこのような声が広がっていくように、地域創造学の取組や実践の成果が分かりやすく地域に伝わる手立てについて、さらなる検討を進めていくことが求められる。

7 今後の研究開発の方向

(1) カリキュラムの不断の見直しについて

本町の研究開発においては、これまでに目指す資質・能力や系統的な指導方法及び評価方法、地域の実態に即した単元計画等を開発・実践してきたが、これらのカリキュラムに関しては、常に見直しを図っていくことが求められる。毎年の単元計画の見直しは基より、本研究開発の根幹となる12の社会的実践力や各ステージ段階における系統表に関しても、これまでの2年半の実践を通して、「滑らかに接続していくためのさらなる見直しが必要なのではないか」という小・中・高の教員の声を基に、部会を中心に、見直しについての検討を進めている。また、指導方法や評価方法に関しても、他地域の先進事例等に学びながら、常に追究を進めていく必要がある。既に実施している教育達成測定や保護者・地域協力者・教職員アンケートの回答結果に関しても、小・中・高の教員が協働してさらに詳細に分析を進め、よりよいカリキュラムの在り方を追究していくことが求められる。

(2) 評価の在り方について

地域創造学は12年間の学びであるということ意識しながら、学年や校種を越えて児童生徒に社会的実践力に関わるどのような変容があったのかについて、長期的かつ詳細に評価していくことが求められる。これまでの取組においても、児童生徒の様々な社会参画に関わる実践が見られるようになってはきたが、これまでに見取ってきた児童生徒の実践の成果については、主に取り組みの結果の成果物等、表面的に表れてきたものであると捉えられる。地域創造学の探究活動においては「探究の六つのプロセス」を大切にしているが、生徒が自身のプロジェクトを実現する過程で、どのようなプロセスの中で、どのようなことに困難さを抱き、どのように乗り越え、社会的実践力に関わる変容や実践に最終的に結びついていったのか、そして教師はそれぞれのプロセスでどのような指導・支援を大切にすることが社会的実践力を育成していく上で効果的だったのかということに関しては、十分に検証できていない課題であると捉えている。そのような課題が生じてきた要因としては、各単元における最後のプロセスである「まとめ・振り返り」の場面において、「まとめ」に時間をかけることとは対照的に、「振り返り」のプロセスにおいては、児童生徒が自覚的に自身の変容を振り返る機会や、教師が各プロセスを通しての児童生徒の細やかな変容を見取ってフィードバックしたり、価値づけたりする機会が不十分であったことが考えられる。このことを解決していくためには、各単元及び年度末等における「振り返り」の時間を計画に明確に位置付けた上で、児童生徒に、自身の探究のプロセスを自覚的に振り返らせることを大切にしていくことが求められる。

(3) 異校種間連携について

保育園年長児を含め、校種を越えた保・小・中・高13年間の学びという視点を大切にしながら、異校種の教員同士が活発に議論を重ねる校内研究会の「相互交流」が定着しており、保・小・中・高の教員が円滑に連携できる素地を一層活かしていく。

保小連携については、取り組んできた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と社会的実践力との関連に着目した分析や、地域創造学以外の保育・教科等も含めた保・小・中・高の保育交流・授業交流等について、「幼保小の架け橋プログラム」等、モデル地域での実践も参考として、保育・教育の改善を行っていく。

また、同校種及び異校種の児童生徒が学び合う「学習者の協働」のよりよい在り方をさらに追究していく。

(4) 「地域創造学協力者会議」の実施

次年度以降も継続して実施し、地域の方々との意見交流を通して新たに得られた視点等を、次年度の年間指導計画や指導方法の見直しにつなげ、学校と地域が連携して児童生徒の「社会的実践力」を育成していく体制を強化していく。

(5) 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）の作成について

地域創造学において、児童生徒が主体的に探究活動を進めていくために、学習指導要領解説を基にした教科書を作成する。第5年次までに試案として作成した高校版の教科書に関しては来年度から活用し、実践結果等を基に、内容の見直しを図っていく。また、小・中学校版の教科書に関しても来年度に作成作業を行い、再来年度から活用していく。内容に関しては、「探究の六つのプロセス」を大切に探究の進め方、これまでの児童生徒のプロジェクト活動等の実践例を記載していく。さらに、新しい実践に基づいて、教科書の内容を年度ごとに更新していく。

(6) 持続可能なプログラムの構築について

町内の小・中・高5校が一体となって新設教科を据えた教育課程の在り方を探るために、町単独予算により配置した指導主事がコーディネーターとなり、地域社会童生徒の実態に応じた資質・能力及び系統表の独自設定、資質・能力を育成していくための学習指導要領解説（指導方法、評価方法）作成、小・中・高の教員が共通理解しながら作成した12年間の系統的な単元計画の策定に取り組んできた。今後も、異校種の取組を滑らかに接続させ、地域とのつなぎ役になりながら、必要に応じて各学校及び教育研究所各部会等の主体的な取組を適切に支援していく町教育委員会の効果的な関わり方について、検討を進めていかなければならない。また、今後も持続可能なプログラムにしていくために、これまでの取組が生徒や地域や保護者にとって本当に効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっていないかなどの検証を行い、取組の内容を精選していく。